

2014 年度 教師教育改革コラボレーション報告書  
ラウンドテーブルの広がりと深化



福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)

編集・発行

2015年3月

## 目次

### はじめに 教師教育改革コラボレーションとラウンドテーブル

#### 第1章 ラウンドテーブルの展開

- 1 ラウンドテーブルの構成と意味
- 2 実践研究福井ラウンドテーブルの歩み
- 3 分散型コミュニティへの挑戦：ラウンドテーブルの広がりと深化

#### 第2章 2014年度 実践研究福井ラウンドテーブル

- 1 Summer Session と Spring Session の概要
  - (1) Summer Session の概要
  - (2) Spring Session の概要
- 2 ラウンドテーブルの実践報告
  - (1) ラウンドテーブル Summer Session の実践報告
  - (2) ラウンドテーブル Spring Session の実践報告
- 3 4つの Zone の展開
  - (1) Zone A 学校
  - (2) Zone B 教師教育
  - (3) Zone C コミュニティ
  - (4) Zone D 授業
- 4 Spring Session 0 知識社会の教師の資本
- 5 Spring Session III 東アジア型教師像と教師教育の探究
- 6 参会者の声

#### 第3章 2014年度 各地域で開かれたラウンドテーブルの事例

- 1 教育実践研究フォーラム @ 長崎大学
  - (1) 概要
  - (2) 参会者の声
- 2 第14回スクールリーダー・フォーラム @ 大阪教育大学
  - (1) 概要
  - (2) 参会者の声
- 3 教師と学校を支える学びあうコミュニティを培う @ 静岡大学
  - (1) 概要
  - (2) 参会者の声
- 4 実践研究東京ラウンドテーブル @ 明治大学
  - (1) 概要
  - (2) 参会者の声
- 5 大学との連携による学校活性化フォーラム @ 宇都宮大学
  - (1) 概要
  - (2) 参会者の声
- 6 教育復興シンポジウム福島教育復興へ向けてIV @ 福島大学
  - (1) 概要
  - (2) 参会者の声

## 付録

### おわりに 教師教育改革コラボレーションの成果中間報告として

# はじめに

## 教師教育改革コラボレーションとラウンドテーブル

福井大学教職大学院は学校を基盤とした教師教育の実現をめざし、「学校拠点方式」による教育課程の編成を採用している。教師の専門性は個人研鑽だけで培われるものではなく、むしろ、学校の中に「専門職の学び合うコミュニティ」を構築することで育成されると考えるからである。つまり、学校改革のための大学院である。これを実現するためには、大学院授業の中心を学校に移し、学校の活動リズムに合わせつつ、入学者の校務分掌を支えながら組織学習を展開していくことになる。したがって、現職教員院生は休職しない。教師の専門性の高度化を今後進めるにあたっては、現職教員が休職しない大学院が必須である。休職する仕方では、国家財政が逼迫する中で、自ずと派遣数に限りがあるからである。

一方、学校を基盤とする教育課程に関しては、校内研修（もしくは OJT: On the Job Training）とどこが違うのか、といった指摘がある。本学教職大学院では、同質性の高い参加者からなる「日々の省察的実践を支えるコミュニティ」から異質性が高い参加者からなる「長期の省察的実践を支えるコミュニティ」まで、多様なコミュニティを準備する分散型コミュニティにすることで、OJT の限界を乗り越える教育課程を準備している。

ところで、学校を基盤とした教師教育を実現していくためには、1 大学 1 都道府県に留まっていたは意味がない。また、県内外の教師・研究者・他の専門職等からなるより異質性の高い「長期の省察的実践を支えるコミュニティ」、つまり「ラウンドテーブル」を開こうと思えば、当然であるが多くの大学や教育委員会との連携協働が欠かせない。さらに、学校を基盤とした教師教育を日本に定着させるためにも、多くの大学や教育委員会との連携協働は重要となってくる。本学教職大学院では、文部科学省の平成 25・26・27 年度事業推進費「グローバル社会に必要な教師教育の革新をスピーディに実現する連携事業の推進」を受け、学校を基盤とする教師教育を実現するための「教師教育改革コラボレーション」を設置した。「教師教育コラボレーション」には教職大学院をもつ大学、教職大学院未設置大学、私学、教員養成課程をもたない大学等が参加している。なお、教職大学院の担当教員の養成を推進するために、いわゆる研究者養成の大学も「教師教育改革コラボレーション」に参加している。これは、徹底したケーススタディを中心とする専門職大学院の教員養成を行っている大学が存在しないからである。

「教師教育改革コラボレーション」がまず手掛けたのは、各地域で展開している学校を基盤とした教師教育の実践をじっくり語り聴き合う「ラウンドテーブル」を全国各地域で開催することである。本報告書は、平成 26 年度に開かれた「ラウンドテーブル」事例を紹介する。学校において地道で着実に進める必要がある授業改革の取組は、一方で「ラウンドテーブル」のような広範な公的空間が用意されてはじめて実現するものである。本報告を手にとられた方の「ラウンドテーブル」への参加を期待したい。

(松木健一)

# 第1章 ラウンドテーブルの展開

## 1 ラウンドテーブルの構成と意味

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

### 実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にいるものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備しえていない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

### 実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進め

ていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実が動かしがたい。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

#### 小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。（1 報告 100-120 分）
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。（6 名程度）
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。（学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか）
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改

めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

#### **パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構**

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

#### **ラウンドテーブルの 4 重の意味**

##### **4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice**

##### **I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。**

###### **Co-reflection in and on longitudinal process of practice**

##### **II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。**

###### **Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice**

###### **I II →省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル**

##### **III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。**

###### **Cultivating Communities of Public and Reflective Learning**

##### **IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ**

###### **Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning**

###### **Communities for Reflective Practitioners**

(柳澤昌一)

## 2 実践研究福井ラウンドテーブルの歩み

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして  
木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる20人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった。）
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的実践を支える協働（第1回）  
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning.  
第1回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者20数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部 児童館プロジェクト 福井大学探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第2回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志  
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る。
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む）（第3回）
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第4回）  
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第5回）
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第6回） 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ」実践研究福井ラウンドテーブル2004（第7回）
- 2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）
- 2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る。
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2005（第8回 参加者100名超）  
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル2005（第9回）
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2006 フェニックス・プラザ（第10回）  
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル2006（第11回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫  
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2007（第12回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
- 2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる。
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル2007（第13回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008（第14回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jaehoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル2008 総合研究棟I（第15回）  
人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2009（第16回）稲垣忠彦
- 2009.6.27-28 実践研究福井ラウンドテーブル2009（第17回）  
5つの領域：専門職として学び合うコミュニティ（分野ごとのセッション始まる）
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2010（第18回参加者300名前後）鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル2010（第19回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2011（第20回 参加者300名を超える。）門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル2011（第21回）松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル2012 spring sessions（第22回）(名称を変更する)
- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル2012 summer sessions（第23回）参加者450名を超える。  
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル2013 spring sessions（第24回）教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル2013 summer sessions（第25回）
- 2013.11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル2013 winter sessions（明治大学）
- 2013.12.14/21 教育実践研究公開クロスセッション（福井大学）
- 2014.2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム（宇都宮大学）
- 2014.1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡（静岡大学）
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル2014 spring sessions（第26回）参加者550名を超える。
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル2014 summer sessions（第27回）
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル2015 spring sessions（第28回）参加者700名を超える。

### 3 分散型コミュニティへの挑戦：ラウンドテーブルの広がりと深化

2001年3月、約20名の実践者や研究者が集まり、「教師の実践的力量形成をめざして」というテーマのもとで互いの教育実践と教育実践研究を交流し合う研究会が催された。ここで放たれた熱き議論が「実践研究福井ラウンドテーブル」の産声である。それから14年もの間、「実践研究福井ラウンドテーブル」は福井県内外と国内外のコミュニティとの往還を絶え間なく積み重ねながら、21世紀の教育を支援するための実践コミュニティを真摯に耕し続けてきた。このたゆまぬ挑戦と努力の成果として、会を重ねるごとに「実践研究福井ラウンドテーブル」への参会者の増加が挙げられるとともに、参会者による実践報告の内容や質の多様化が挙げられる。「実践研究福井ラウンドテーブル」の創世記には少数の実践者の報告のみだったが、現在では研究者も自らの「実践」を報告し、さらに地域コミュニティの人々も自らの取組とその実践的意味を探究するために実践報告を行うようになった。この間、国際的な教育研究の前進を足がかりとしながら、教育の質保証と学びの転換を目指す多種多様な教育改革の施策や取組がなされてきた。その全ては、21世紀の知識社会に生きる子どもたちの幸せを保証するための挑戦であり、子どもたちの成長を支える全ての教育関係者の実践を支えるための挑戦である。「実践研究福井ラウンドテーブル」はこれらの挑戦を促し支えるための省察的機構としての実践コミュニティである。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの文字通り「実践の省察」を促し支えることをビジョンとする。このビジョンを基盤とした「実践研究福井ラウンドテーブル」には、日本全国や世界各地から多数の実践者や研究者が集まる。当然、彼ら／彼女らは「実践研究福井ラウンドテーブル」とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属しており、それぞれのコミュニティ内でイノベーションを生み出す実践に挑戦している。つまり、「実践研究福井ラウンドテーブル」はローカル・コミュニティが集合する大きな、コミュニティの「坩堝（るつぼ）」なのである。もしも、このコミュニティの中で数多あるローカル・コミュニティが有機的に結びつき、そこでコミュニティ間の相互作用が加速化すると何が起きるのだろうか。それはおそらく新たな「知」の創発であり、新たな「かかわり」の生成であろう。これら新たな「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなればなるほど、現代社会を取り巻く困難や格差を突破するためのいくつかの「解（ソリューション）」が生み出される可能性が高まる。ただし、このダイナミクスを大きくし、このダイナミクスの質を深化させるためには「戦略」が必要になる。ただ指を加えて待っているだけではダイナミクスやイノベーションは起こらないのである。

福井大学教職大学院はこれまでの「実践研究福井ラウンドテーブル」の展開で結びつきを強めたいいくつかのコミュニティと連携し、「分散型コミュニティ」の設計に着手し始めた。日本全国そして世界各地にあるコミュニティの相互作用と化学反応を生み出すためには、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことが可能な「分散型コミュニティ」を設計することが肝要である。複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そこで互いの課題や問題を同定し、それらの解決策を考案し、共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え後押しすることが可能になる。「分散型コミュニティ」への挑戦とはつまり、「グローバル・コミュニティ」を築くための挑戦なのである。

2014年度には福井大学教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島で共有された理念とビジョンに基づく「ラウンドテーブル」が開かれた。この「ラウンドテーブル」の広がりと共に各地で放たれた息吹は、日本の教育実践を支える新たな「省察的機構としての実践コミュニティ」の産声である。そしてこの実践コミュニティの足音はすでに様々な地域で共振している。この実践コミュニティは、おそらく日本の教育界ではじめて戦略的に組織化された「分散型コミュニティ」であり、今後数年あるいは十数年で「グローバル・コミュニティ」へと深化・進化することだろう。

(木村優)

## 第2章 2014年度 実践研究福井ラウンドテーブル

### 1 Summer SessionとSpring Sessionの概要

#### (1) Summer Sessionの概要

2014年6月21日・22日の2日間にわたって開催された「実践し省察するコミュニティ 実践研究福井ラウンドテーブル2014 Summer Session」には全国から多様なメンバーが集まり、およそ462名（1日目445名、2日目265名）の参加があった。

1日目は、福井大学文京キャンパスおよび福井駅前にあるAOSSAを会場とし、主なテーマごとに4つのゾーンに分かれてのポスターセッション、シンポジウム、フォーラムが行なわれた（各Zoneの詳細については後掲）。また、今回は高校教育・高大連携に関する特設公開セッションが同時開催され、また新たな広がりをみせることとなった。各ゾーンのテーマ及び参加者数（申し込み者数）は以下の通りである。

#### Zone A 学校（参加申し込み者数：104名）

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ 教師のやりがい生まれる学校

#### Zone B 教師教育（参加申し込み者数：35名）

教職大学院をイノベーションする 教職大学院を担う教員の資質能力向上に向けて

#### Zone C コミュニティ（参加申し込み者数：135名）

学び合うコミュニティを培う 世代をこえて学び合うコミュニティをコーディネートする

#### Zone D 授業（参加申し込み者数：65名）

授業改革の扉を開く 質の高い学びを生む問いとは？

#### 特設公開セッション高校教育・高大連携（参加申し込み者数：54名）

SGH校がめざすこれからの高校教育の展望とグローバル社会における学びの転換

参加者はそれぞれ自身のおかれた現状や課題、そして希望などを熱心に語り合い、いずれのZoneにおいても時間が足りなくなるほどであった。またSessionⅢ終了後には懇親会も開催され、ここでも、多数の参加者が時間を忘れて、そして互いの年齢や立場、職種や専門領域を超えて語り合う姿が見られた。

（笹原未来）

#### (2) Spring Sessionの概要

2015年2月27日（金）・28日（土）・3月1日（日）の3日間にわたって開催された「実践し省察するコミュニティ 実践研究福井ラウンドテーブル2015 Spring Session」には、712名が参加し、福井県内からは358名、福井県外からは354名であった。福井県外の参加者には、アメリカから2名、中国から6名、留学生1名の外国からの参加者も含まれた。

1日目にはPre-SessionとしてESDに関わるシンポジウムとグループ協議,2日目の午前中にはSession0として国際シンポジウムが行われ,午後には,4つのZone(A:学校,B:教師教育,C:コミュニティ,D:授業)に分かれてポスターセッション,シンポジウム,フォーラムが行われた。

各Zoneのテーマ及び参加者数(申し込み者数)は以下の通りである。

Pre-Session (参加申し込み者数:77名)

ESDがSDとなるには? ESDのメインストリーム化に向けて

Session 0 シンポジウム(参加申し込み者数:462名)

知識社会の教師の資本

Zone A 学校(参加申し込み者数:159名)

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ 子どものこと,授業のことを語り合える組織づくり

Zone B 教師教育(参加申し込み者数:185名)

21世紀の教師教育をイノベーションする:学校を基盤とした教員養成と教員研修のあり方

Zone C コミュニティ(参加申し込み者数:93名)

学び合うコミュニティを培う:持続可能なコミュニティをコーディネートする

Zone D 授業(参加申し込み者数:111名)

授業改革の扉を開く:教師は授業sで何を残したいのか?

その他(参加申し込み者数:16名)

2月28日(土)のSessionIII後の懇親会にも190名が参加した。

(岸野麻衣)

## 2 ラウンドテーブルの実践報告

### (1) ラウンドテーブル 2014 Summer Session の実践報告

2日間にわたって開催されるラウンドテーブルであるが,2日目には多様なメンバーが6名程度の小グループの中で互いの実践の長い道行きをじっくりと語り合い,実践の展開を支える営みを聴き合うラウンドテーブル クロスセッションが開催される。2014年6月に開催されたラウンドテーブル 2014 Summer Session のクロスセッションには265名(福井県内参加者:158名,福井県外参加者:107名)の参加申し込みがあり,当日は6会場44のグループに分かれて,互いの実践にじっくりと耳を傾けた。

参加者の内訳としては,およそ4割にあたる95名が学校教員(現職院生含む)となっている。その他,学校管理職や行政職・指導主事,社会教育関係者,障がい・福祉関係者,大学生,大学院生,研究者といった非常に多様な参加者によってラウンドテーブルは支えられている。また,265名の参加者の

うち、130名（県内参加者：72名，県外参加者：58名）が自身の実践を携えての参加となっている。なかには、自分の実践を捉え直し、また次の展開を切り拓いていくための機会として年間のサイクルの中にラウンドテーブルを位置づけている参加者や、教職大学院の修了生の参加も年々増加している。

多様なメンバーが年齢や職種，専門領域や地域を超えて実践を語り合い，聴き合う。ラウンドテーブルの構成とその意味が広く共有されつつあること，そしてラウンドテーブルが多くの人の実践を支える機会となっていることを改めて実感する Summer Session であった。

（笹原未来）

## （2）ラウンドテーブル 2015 Spring Session の実践報告

3月1日（日）の実践報告のラウンドテーブルは，参加者申込者が414名であり，そのうち報告者は225名であった。ラウンドテーブルは，5～6名で編成された76グループに分かれ，それぞれのグループで，3名からそれぞれ60～80分の持ち時間で報告が行われ，実践が交流された。225名にのぼる報告者の内訳は，次の通りである。

まず大学・大学院関係として，福井大学教職大学院の院生，修了生をはじめ，静岡大学等，他大学の教職大学院院生の報告もなされた。また，福井大学，早稲田大学，玉川大学，九州大学等からは，学部生・大学院生の報告もなされた。学校関係として，福井大学教育地域科学部附属小学校・中学校をはじめ，信州大学附属長野小学校，東京大学附属中等教育学校等，他大学の附属学校からも多くの報告がなされた。福井県内の公立学校からも多くの報告がなされたほか，北は北海道，南は長崎県から公立学校の教諭が参加し，全国の学校関係者から報告がなされた。またその中には，教諭だけでなく，校長や教頭等管理職としての実践報告も見られた。教育行政機関としても，福井県教育研究所をはじめとする福井県内の機関のほか，栃木県や和歌山県等全国の教育委員会や教育センターの報告もなされた。

さらに，社会教育関係として，福井県内の公民館の社会教育主事をはじめ，他県の実践報告の研究者等からも実践報告がなされた。医療・福祉分野からの参加者もあり，福井県内の障害者施設や，福井県外の看護大学からも報告がなされた。その他，福井県外の不登校支援のNPO法人や，福井県内の葬儀屋の報告等もあり，多種多様な領域からさまざまな報告がなされた。

聴き手についても同様に，全国からの大学関係者（学部生，院生，大学教員等），学校関係者（国公立学校の教諭，管理職等），教育行政機関関係者（教育委員会，教育センター等），社会教育関係者（公民館や生涯学習室等），企業経営者など，様々なメンバーが聴き手として実践報告に耳を傾け，意見交換がなされた。

なお，福井市教育委員会との連携で，次年度教員として採用される者の任用前研修にも位置づけられ，教員採用内定者の参加も多く見られた。

（岸野麻衣）

### 3 4つのZoneの展開

#### (1) Zone A 学校

##### 2014 Summer Session

Zone A では、テーマ「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」に「教師のやりがい  
が生まれる学校」というサブテーマを加え、「やらされ感」を超える「教師のやりがい」に切り込んで、  
学校づくりについて考えていくこととなった。



Session I ポスターセッションでは安居中学校から、初の生徒  
による報告が行われた。「朝ラン」「夢授業」「思い出語ろう会」  
など特色ある取り組みが紹介され、次々と投げかけられる質問  
にも堂々と自分たちの思いを語る中学生の姿が印象的であった。  
板橋区赤塚第二中学校からも教科センター方式についての取組  
や安居中学校との交流についての報告もあり、両校の連携の姿  
も窺われた。芦原中学校や附属小学校、新座高校からは授業研  
究を柱とした協働の様子が報告され、熱く語る先生方の姿から  
学校全体が、やりがいを持って取り組んでいる様子がそのまま  
伝わってきた。拠点校の中藤小学校や至民中学校、丸岡南中学

校からは今年度の取組が紹介され、昨年度の課題を踏まえてさらに一歩進んで改革に挑戦していこうと  
する姿に、こちらも奮い立つ思いであった。附属特別支援学校から縦割りグループ研究、嶺南東特別支  
援学校から授業改善の日常化が提案され子どもたち一人一人の姿にやりがいを見つける教師の姿が明  
らかにされた。どの取り組みからも、先生方の学校全体を動かしていくパワーとその原動力となるやり  
がいが感じられ、まさに「やりがい生まれる学校」の実践を様々な角度から報告いただいた。

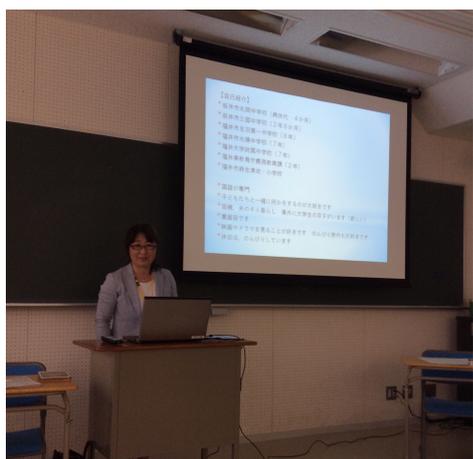
Session II シンポジウムでは、宇都宮大学の原田浩司先生から昨年度まで校長として勤務されていた鹿  
沼市立みなみ小学校の学校改善と教師力の向上について報告いただいた。着任当時いわゆる「荒れ」の  
状況にあった学校に対し、学習不適應を起こしている子どもたち一人一人に向き合い、その子どもの中  
の学びへの希望を見出す。危機の背景には、声にならない子どものニーズが潜んでいる。1つの学級の  
問題を学校の問題として捉え、全学級で足並みをそろえて取り組んでいく。教師が子どもの本当のニー  
ズを見取る力をつけ、授業改善に繋ぐとき、子どもの姿も変容してきたという。朝学習は全員、同じこ  
とを強要せず、ついて行けない子は希望をとって校長先生自らが図書室で学習支援にあたる。子ども  
のために労を惜しまないこうした姿が徐々に形となり、学校全体が集中する「朝の15分間」をつくりあ  
げた。一人一人の教員は自分のテーマを持って、課題に向き合いつつも、教師集団としての確かな向上  
も感じられるようになってきた。「美しい花だけでなく、剣山が必要なのです」といわれた言葉が印象  
的であった。一人の教師のやりがいは他の教師のやりがいにつながり、それが学校改善に繋がる大きな  
パワーとなったとき、「教師のやりがいを生む学校」となる。また逆に「教師のやりがい生まれる学校」  
には教師のやりがいが育っていく。教師集団が学校を変えていくのであるが、学校改革は教師の意識改  
革を促すとも言えるのである。管理職として広い視野に立って教師集団を率いつつ、子どもたち一人一

人に真摯に向き合ってきた先生の思いが伝わって胸が熱くなった。

安居中学校加藤学教諭からは「社会参画型学力」という大きな共有ビジョンを掲げて、学校の移転開校というチャンスを活用した様々な改革の取組が具体的に報告された。「夢授業」「ほたる観察会」「思い出語ろう会」などを通して生徒と協働した学校づくりを生き生きと語る姿はまさにやりがい満ちている。「私にとって学校は夢を叶える場所です」という加藤先生の思いも、



初めから全教員にすぐ理解されたわけではない。教員よりもむしろ子どもに働きかけることで、子どものコミュニティが形成され、それが教員のコミュニティに繋がっていく。会場にはたくさんの安居中の生徒たちが集まり、加藤先生の報告を先生としてというよりもむしろ協働参画者として熱心に聴いている。「安居中は仲間と絆を創るところ、先生と交流して自分を高めていくところです」という子どもの言葉に、会場から感嘆の声が上がった。コーディネーターの千々布先生からも子どもたちに安居の良さについて問いかけられ「仲がいいので互いの意見を言い合えて練り合える。授業中も自分の意見を言えてわかりやすくなった」とまさに授業改革の成果が見える。むりやり全教員を一つにしようとしなくても学校が変われば教師は変わる。では学校が変わるきっかけはといえば、みなみ小のような危機意識のあるときであったり、校長のリーダーシップであったりする。会場からは「では危機意識もない平和な学校で校長先生もこのままでよいと思っていたら？」と新たな問い。「企業なら組織開発を迫られている時代だがその流れもない学校にはやはり授業研究の活性化が一つの切り口で指導主事訪問等はその一つのチャンスであろう」と締めくくられた。



Session IIIでは Session II に倣って、3 会場で管理職とミドルリーダーの報告があり、グループ討議となった。Session II に続くそれぞれの思いがありその感想も含めて「何かをのりこえたときやりがいが生まれるのでは」「学校を変える必要は本当にあるのか」などさらなる深い話し合いが行われた。グループ内ではこのようにしめくくられた。「少なくとも授業を変える必要はある。なぜなら子どもたちそのものが日々変わっており、教育も日々動いているから。ゴールは子どもの力を伸ばすことであり、やりがいもそこにある。我々が今、まず夢中になって取り組める一つのきっかけが授業改革だろう」誰しも子どものために本当に価値があると実感できれば動き出す。無理のない自発的な改革は、子どもの笑顔を生み出すところから始まるのである。

(小林真由美)

## 2015 Spring Session

Zone A では「学校」における「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマに考えてきた。今回は特に「子どものこと、教師のことを語り合える組織づくり」に焦点を当てた。

Session I ポスターセッションでは、福井県内外の学校から、それぞれの学校でどのように学校づくりに取り組んでいるか、報告いただいた。福井県の中学校・高等学校からは生徒のみなさんにも報告いただき、子どもも教師も共に学び合う姿が印象的であった。

Session II シンポジウムでは、長野県中野市立中野小学校の武居和紀研究主任、福井県福井市至民中学校の鈴木三千弥研究主任、金沢大学附属高等学校の風間重利副校長から話題提供をいただき、東京大学の秋田喜代美教授からコメントいただいた。武居先生からは、研究のための研究でなく日常の授業改善に向けて、「心を寄せたい子」を中心に研究を深め、互いに授業を見合い、子どもの姿を語り合っ、教師が学習観や授業観を転換させていく過程を、具体的な事例をもとにお話しいただいた。鈴木先生からは、日常的に授業について語り合う場を大事にしつつ、見合った授業について参観記録を交換する取組や、生徒のくらしにかかわる多角的な切り口で校内研修を充実させる実践が報告され、教師同士が支え合う文化を作っていることとお話しいただいた。風間先生からは、学校のこれまで抱えてきた課題を赤裸々にお話しいただきながら、教科の徒弟的な枠組みに囚われず、世代を超えて教師たちがチームになって、学校改善といういわば教師の「総合的な学習」に取り組んでいった過程が語られ、学校がみんなのものになるようにつなぎながら、動きを活性化させていることとお話しいただいた。これらを踏まえて、秋田先生からはそれぞれの学校の実践を整理しながら、生徒の出来事と育ち、出来事の展開とつながり、環境の構成と再構成について、短期的・長期的な観点でいかに目に見えるようにしていくか、語り合ったり書いたりして目に見えてくることで教師の仕事の手ごたえや楽しさにつながっていくのではないかと、授業研究会の持ち方やビデオや写真の活用についても多くの学校で検討の余地があるのではないかとお話しいただいた。

シンポジウムではそれぞれ魅力溢れる語りに引き込まれ、コーディネーターとしてはまとめきれずこの場を借りてお詫びしたいところだが、「組織づくり」というときに、単に研究会のやり方等の形式的な答えを求めるのではなく、それぞれの学校の置かれた状況の中で、どうすると「支え合う」ことができるのか、協働で探究していくことが大事だと改めて考えさせられた。きっと参加者の方々も、どうしてそんなことができるのだろうか、自分の学校はどうか？と考えを巡らせたことと思う。

Session III では、参加者の考えたこと、自分の学校での取組や課題について、5人程度のグループに分かれて語り合った。部屋を移動して、最初こそ戸惑う様子も見られたが、語り始めるとどのグループも熱気を帯び、学校を越えて語り合い、学び合うコミュニティが展開していったようで、企画者の一人として大変うれしく思う時間となった。

(岸野麻衣)

## (2) Zone B 教師教育

### 2014 Summer Session

Zone B (教師教育) では、3月のラウンドテーブルで行った「教職大学院をイノベーションする」の第二弾として、「教職大学院を担う教員の資質能力向上に向けて」をサブテーマに、教職大学院の教員としてどのような資質能力が求められ、それに向けてどのような取組みができるのかを考えていった。

まず、Session I ポスターセッションでは、次のシンポジウム、フォーラムにつながるよう、福井大学からは、本学が着手している附属・学部・大学院の融合による三位一体の改革のコンセプトや方向性、教員の資質向上に向けての考え方や取り組み状況を、また、既存の大学院と教職大学院を教職大学院に一本化し新たな教師教育に取り組んでいる長崎大学からは、同大学の現状を紹介していただいた。

Session II シンポジウムでは、最初に文部科学省の森氏から、教員養成に係る現状と課題、教員養成の改革と現状、国立大学の機能強化、大学院段階の教員養成の状況と教員養成の改善・充実に向けての最近の国の動きの詳しい報告があり、テーマに関わる全体像を示していただくとともに教職大学院への期待の大きさも確認できた。次に、静岡大学の梅澤氏からは国立大学改革による新教職大学院に向けての現状や課題、特に教育学研究科と教職大学院の新しい設置基準に関し、修士課程と教職大学院の両方のニーズにどう対応するかについて、具体的な問題提起と提案がなされた。次に、これまで長く教職大学院の創設に関わってきた村山氏は、もはや個々の教師の情熱や力量だけで学校が成立する時代ではなく、教師の個人レベルの力量だけではなくチームで対応できる力量の形成も重要であること、また、学校改革の一環としての教師力の向上が大切であり、教職大学院がその学校改革と教師教育の要とならなければならないことを熱弁された。そのためには、理論と実践の往還を保障する学校拠点方式や、学校実践を探究的に省察することの重要性を強調され、本学が取り組んでいる実践を高く評価していただいた。最後に、本学の岸野准教授が、「学校協働研究と教師の専門性の向上を支える実践コミュニティにおける力量形成～福井大学教職大学院のFD～」というテーマで、本学教職大学院には多様なバックグラウンドを持つ教員がチームとして協働で探究する場が豊富にあり協働して実践するコミュニティの中で力量が形成されていくことを、具体的な実践をもとに紹介した。

Session III では、前半は、福井大学教職大学院での具体的な取組について4人から話題提供があった。まず、森田准教授より、附属学校で実際に教鞭を執りながら大学にも籍を置く立場から、自身の「研究実践者教員」としての現状や課題、今後の展望についての話があった。次に、教育委員会との人事交流での交流教員としての立場から、福井県との交流教員である私から「実務家教員としての学びと教育現場への波及」について、また、長野県からの交流教員である宮下准教授から「今、私に起きていること」として、日々の日常的な協働の活動の中での気づきや自身の豊かな学びについての話があった。最後に、山崎特命助教が、本学教職大学院が今後取り組む予定であるED.D.について、英米の状況と、今後の展望や課題を話し、後半のグループ協議に入った。

グループ協議では、Session II と Session III を受け、教職大学院においては教師のどのような資質能力が求められ、資質能力向上に向けていかなる取組の可能性のあるのかについて協議した。実践を問い直し十分議論する場としてはやや時間が少なかったかもしれないが、全体を通してこのZone Bで共有された

ディスカッションは、参加者にとって、今後の具体的な取組みにつながっていく有意義なものであった。

(二宮秀夫)

### **2015 Spring Session**

Zone B (教師教育) では、「21 世紀の教師教育をイノベーションする—学校を基盤とした教員養成と教員研修のあり方」をテーマに、これまでの分断された教員養成と教員研修を、生涯にわたる教師の職能成長を支える教員養成と教員研修へと、どう転換していくのかその方策を探っていった。特に、大学と教育委員会が協働して、どのような教員養成を展望し教員研修の充実を図るのかに焦点をおいて議論を深めていった。

Session I では、福井大学教職大学院と連携して教員研修を行っている福井県教育研究所、福井県特別支援教育センター、そして福井県嶺南教育事務所から、福井県内における教育委員会と大学の連携の実践例についての発表があった。

続く Session II シンポジウムでは、本学教職大学院の松木健一教授の司会進行のもと、学校を基盤とした教員養成と教員研修のあり方について、国及び地方自治体レベルの教育行政と大学・大学院それぞれの視点からの議論がなされた。福井県教育委員会教育長の林雅則氏および長野県教育委員会教育長の伊藤学司氏からは、両県における教員研修の現状、これからの教員研修のビジョン、目指す方向性、そして大学と教育委員会の連携体制の概要が提示された。また、文部科学大臣補佐官・福井大学教職大学院客員教授の鈴木寛氏および学習院大学教授の佐藤学氏より、教員が自分の研修を自分自身でデザインする重要性と、その支えとなるような制度設計の必要性等が指摘された。

Session III のフォーラムでは小グループに分かれ、(1) 都道府県教育センター、(2) 福井県教育研究所など本県の教員研修機関、(3) 大学・大学院 の三者から、それぞれの教員養成と教員研修に関する取り組みと実践について話題提供いただき、また参加者の方々の所属機関における取り組み等についても伺いながら、これからの教師教育に何が必要かについて共有していった。

また、今回は Session III の特別企画として、「東アジア型教師像と教師教育の探究—上海師範大学の研究と実践から学ぶ—」を開催し、中国の上海師範大学と上海市教育委員会における教師教育の現状についても聞く機会を持つことができた (詳細は後述)。

養成・採用・研修の一体化は、教師教育にとって非常に重要なテーマであると見なされているにもかかわらず、養成の主体である大学と採用・研修の主体である教育委員会がどのように連携していくべきかについての議論はこれまで驚くほど少なかったように思われる。今回のラウンドテーブルでは、各機関における養成・研修の現状と今後の方向性について共有することができた。今回共有された知見をさらに発展させていくことが今後の課題といえよう。

(山崎智子)

### (3) Zone C コミュニティ

#### 2014 Summer Session

Zone C (コミュニティ) は、前回に引き続き、福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、JR 福井駅東口前の AOSSA にて開催の運びとなった。Zone C は、地域コミュニティの発展を支える自治と学習、およびそこでのコーディネーターの役割をテーマとし、これまで実践交流を積み重ねてきている。そして、特にここ数年は<地域コミュニティ>とそれを支える実践者から成る<組織としてのコミュニティ>の双方が持続可能である仕組みをどのようにつくっていくかという課題に取り組んでいる。

Session I ポスターセッションでは、福井県内の公民館、福井ローターアクトクラブ、福井大学探求ネットワークといった 34 もの多種多様な実践が会う場となった。福井ローターアクトクラブの趣向を凝らした紹介があったり、大学生が公民館主事に自分達が考えている企画アイデアを聞いてもらうといった次のアクションにつながる出会いが起こったりと有意義な場であった。

Session II シンポジウムでは、福井市森田公民館主事の吉田智子氏と、福井新聞社コウノトリ支局記者の伊藤直樹氏をシンポジストに迎え、前回に引き続き「持続可能なコミュニティをコーディネートするーコミュニティをひらき支える広報と記録ー」というテーマに取り組んだ。両氏からは、広報と記録がつくられていくプロセスを大切にすることの意義と、そのプロセスが積み重ねられていく中で広報・記録の持つ意義が地域住民との間で少しずつ変化・発展していく様子が、それぞれの具体的な取り組みに基づき紹介された。

Session III クロスセッションでは、シンポジストの問題提起を踏まえ、6~7人ほどの小グループで、地域・世代・分野を超えた活動の交流と共有が行われた。今回は福井大学の学生の報告が多く、学生の実践に公民館主事、企業の方、地域住民の方々がじっくりと耳を傾け、そこに新たな意義を見出したり次の展開につながるアイデアが生まれたりする場面があちこちのテーブルで起こっていた。Session I・II・IIIを通じ「学び合うコミュニティ」が体現されていた Zone C であった。

(半原芳子)

#### 2015 Spring Session

Zone C (コミュニティ) は、福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、JR 福井駅東口前の AOSSA 会場にて行われた。Zone C では、これまで、各地で取り組まれている長期に渡る実践の歩みとその展開を、地域・世代・領域を超え共有し検討し続けている。そして、ここ数年は、コミュニティの発展における「持続性」をめぐる問題に焦点を当て、互いの実践から学び合っている。

Session I ポスターセッションでは、福井市・越前市・池田町・勝山市の公民館がそれぞれの特色ある取り組みを紹介し、また福井大学探求ネットワークの9つのブロックが実践を報告した。地域の課題に取り組む公民館主事と学生両者が出会い、そこに他県の実践者や AOSSA を訪れた福井市民の参加があり、多様な声が響き合う場となった。また、ギャラリーコーナーには、福井市の公民館紹介コーナー、『福井の公民館』コーナー、福井学「福井らしさの再発見」コーナーが設置され、参会者が福井の公民

館の「これまで」と「今」に出会う場となった。

Session II シンポジウムでは、NPO 法人市民メディア・イコール副理事長の遠藤恵氏と越前市味真野公民館主事の久島幸江氏をシンポジストに迎え、「＜女性たちの声を聴く＞実践の可能性」と題し、コミュニティの持続的な発展と専門的力を支える「語り・聴く」ことの意義を考えていった。具体的には、遠藤氏からは、『ふくしま、わたしたちの3.11～30人のHer Story～』の制作にあたり、被災者一人ひとりが語ること、そしてその語りを聴き記録することを通じ得られた成果と意義が報告された。久島氏からは、若い世代の加入が減り、リーダー不足や組織活動が弱体化している味真野地区女性会の状態調査（話し合い調査）の実践から見えてきたことが紹介された。両氏の報告を受け、フロアからは、今後コミュニティ・コーディネーターという意識で地域に関わっていくことの必要性等が提起された。

シンポジウムでの問題提起を受け、Session III クロスセッションでは、小グループでの実践交流が行われた。今回は学校教員や教育委員会の方の参加も一定数あり、地域の課題に地域と学校が連携し取り組んでいくことを模索するグループもあった。各 Session を通じ、多種多様な実践が出会い、まさに「学び合うコミュニティ」が培われる有意義な場であった。

#### (4) Zone D 授業

##### 2014 Summer Session

Zone Dでは、昨年度3月のラウンドテーブルのテーマ「問いはどこから生まれてくるのか」を受け、今回のテーマ「質の高い授業を生み出す問いとは」を、ポスターや写真、動画を使った実践発表を78名の参加者と共有し、協働で省察することによって探究した。ポスター発表は4つ有り、1つ目の福井大学美術サブコースの学生は、世界各国の特徴的なアプローチをもつ美術の実践を紹介し、「あなたはどの国の美術の授業を受けたいか」という問いを聴衆に投げかけた。2つ目の大河内小学校の古屋先生は、ふりかえりノートや保護者参加などを核とした学び合いの実践、3つ目の特別支援学校の柳沢先生は、異学年が協働で学ぶレインボータイムと呼ばれる縦割り集団による協働的な学習によって学びを深めた実践、最後は荒土小学校の大塚先生から、巣作りをするセキレイのライブカメラなど身近な生き物の生態に児童がいつでもアクセスできる学習環境を作り、そこから環境や理科の学習の問いを生み出す実践が紹介され、聴衆と活発な議論が行われた。

古屋先生のふりかえりノートの実践についてもっと詳しく聞きたいという要望が多数有り、シンポジウムの合間に時間を設けて説明してもらったなど、大変盛り上がった。

シンポジウムでは3つの発表があった。まず森田中学校の南部先生は、そもそも「教師は授業で本当に問いを発しているのか」について指導主事時代に集めた膨大な数の指導案を全て調べ、問いが明記されている指導案の割合が全体の1割程度しかなく、しかもそのうちの4割近くを理科だけで占めているなどの事実を明らかにした。また、Zone Dのテーマの「問い」を、「授業の骨格をつくる発問」と定義した上で、子どもの生活の論理と教科の論理のどちらの視点に近い問いかなど、問いには様々なものが有ることを指摘した。

このような問題提起を受け、質の高い学びとはどのようなものか6人の小グループで考えを出し合っ

たり、全体で考えを共有したりしながら、質の高い授業における問いの重要性について、一人一人が理解を深めることができた。

2つ目はカリタス小学校の加藤木先生から、6学年の「総合&国語」の実践報告「宮澤賢治の世界へ～銀河鉄道の夜をプラネタリウムで表現しよう～」が報告された。プロジェクト型の総合的な学習の中で、自前のプラネタリウムを創るという長期スパンの探究において、子どもたちが様々な困難にぶつかり、問いの答えを探し求める姿が映像を使って生き生きと紹介された。

3つ目は敦賀気比高校の滝田先生から、「なぜ僕たちは美術を学ぶのか」という生徒の問いの答えを教師が生徒と共に苦悩しながら探し求める授業づくりという探究が紹介された。まさに人は問われて考えるのだ。そこには「言葉だけでは表せないことを美術は表現できる」と美術を学ぶ意義に気づく生徒の成長に、うれし涙を流す教師の姿があり、それに共感して感動し涙腺が緩む聴衆の姿があった。いずれの発表も具体的な活動に基づいて、他者との協働探究により実感を伴った理解を深めていて、授業の後に子どもに何が残るのかについても考えさせるものであった。

(小林和雄)

### 2015 Spring Session

Zone D では、これまで5回のラウンドテーブルを積み重ねながら、授業にまつわる問いを深めてきた。子どもの目線から授業を体感し、授業者としていかに冒険できるかを問い直し、授業を駆動する問いはどのように生まれるのかへと問いを進め、質の高い学びを生む問いとはどのようなものかを問うに至った。迎えた今回、原点をまっすぐに見つめ、「私たちは授業の積み重ね（授業s）の末に何を残したいと願うのか」を聴きあい、語りあった。

Session I, 4枚のポスターに囲まれた空間に実践の語りと傾聴の熱が満ちた。牛久市立下根中学校から「わからなさの共有」による学びの共同体が、勝山市立鹿谷小学校から地域の自然にふれあい実感とともに理解を深めていく「持続発展教育」が、横浜山手中華学校から笑顔と好奇心にあふれる「美術教育」の光景が、お茶の水大学附属小学校から子どもの自主性を生かした「ひろがる・つながる学びをつくる」フレネ教育が、次々と語られた。語り進むにつれ、場には一体感が生まれ、4つの物語が積み重なり、ともに授業を考える対話の萌芽が宿った。

Session II, 会場の扉を開くと、壁面をうねる巨大な龍が迎えた。龍は横浜山手中華学校の子どもたちの美術作品。子どもたちの手と心の結晶に囲まれた会場で、「子どもの頃の授業で、何を覚えている？」と問いあうことからセッションが幕を開けた。驚いたこと、先生の脱線、解った喜び・・・かつての授業の記憶が和やかにわかちあわれた場に、最初の報告、山梨県見延町立大河内小学校の古屋和久教諭の語り染み渡った。その語りは、子供たちが夢中になって学びあう「教室文化」をいかに作り育



てるかに源を発し、授業外の活動を、学びを支えるものへと捉え直すこと、事例としての「学びの足跡」を残すノート指導へと展開していった。

静かな語りに内包された学びへの真摯な思いに背中を押されるように、私たちは互いの胸中に残る余韻を対話し、次に問いを進めるべきことを模索した。象徴的な問いが学生から投げかけられた。「学びあいの大切さは理解できる。でも、どうやったらこういう授業ができるのでしょうか?」。この問いは、次のセッションへの橋渡しのように響いた。

Session III, 続く報告で、埼玉県立新座高校の深見宏教諭から、生徒が主体的に学びあうために必要な「解放」が語られた。「ここでなら自分を表現しても受け入れてもらえる」と安心できる解放された関係と空間に、身近なものに翻訳された授業テーマが投げ入れられた時にこそ、生徒はつながりあい学びあいを始めるのではないか。柔らかく穏やかな語りに耳を傾けるにつれ、私たちの思考と関係はゆったりとした深まりを帯びた。

ふたりの教諭の報告が4枚のポスターの物語とも結びつき、余韻が様々に交錯し融合し触発した。ここに至り会場には、授業の本質を問いを進めるにふさわしい充実した空気が満ちた。しかし刻限は訪れ、最後にひとつの問いに思いを巡らせるにとどまった。「私たちは、授業の積み重ねの中で、子どもたちに何を残したいと、本気で願っているのだろうか?」。沈思の後、多様な思いが多様な言葉で紡がれた。いずれもが教科を超えて、学ぶことの本質とは何かを見通していた。

今回の Zone D は、私たちに何を残しただろう。掲げた問いの大きさに比して過ごした対話の時間はあまりに短く、達成感より、さらに問いを進めなければならないという教師としての責任や意欲が残されたように感じた。途中、学生から投げかけられた「どうしたらこういう授業ができるのでしょうか?」という問いは、問いとして響き続けるからこそ、そのような授業が可能になるのかもしれない。

(富永良史)

#### 4 Spring Session 0 知識社会の教師の資本

2015年2月28日(土) 10:30-12:00 に実践研究福井ラウンドテーブル Session 0 として、「知識社会の教師地の資本」と題したシンポジウムを開催した。本シンポジウムには、ボストン・カレッジ教授のアンディ・ハーグリーブス氏を招聘し、ハーグリーブス氏から「知識社会の学校と教師」と「専門職の資本」を交えた基調講演が行われた。そして、この基調講演を受けて、学習院大学教授の佐藤学氏と東京大学大学院教授の秋田喜代美氏からレスポンスとコメントをいただいた。ハーグリーブス氏の先鋭で洗練された講演は日本の教育改革の方向定位にかかわる示唆に富み、佐藤氏と秋田氏によるレスポンスとコメントは「知識社会の学校と教師」への温かなエールに溢れ、さらに、400名を超える多数の参会者に恵まれことから、本シンポジウムは福井大学教職大学院及び日本の教育改革にとって一つのエポック・メイキングになったと思われる。

また、シンポジスト3者からそれぞれ、知識社会が進展しつつある日本の教育改革及び教師教育改革の方向定位が示されるとともに、参会された様々な専門職、特に知識社会の学校と教師へ温かなエールが送られた。以下では、ハーグリーブス氏による基調講演「知識社会の教師の資本」の概要

と若干の考察を述べる。

知識を最重要視する経済、すなわち「知識経済」が今を生きる私たちに対して「イノベーションを絶え間なく生み出す力」、「創造性を発揮する力」、「他者と円滑にコミュニケーションを行う力」、「チームで働く力」等、いわゆる「キー・コンピテンシー」や「21世紀スキル」という名で呼ばれる力の必要性を主張するようになった。しかし、ハーグリーブス氏はシンポジウムにおいて、「知識社会という言葉がいつのまにか知識経済という言葉に置き換えられ、そこで知識社会に含意される重要な事柄が捨象されている」と述べ、「21世紀の六分の一が過ぎ去ろうとしている今こそ、『知識社会』について実践者と研究者で協働探究する時だ」と私たちに語りかけた。



「知識社会」とはそもそもどのような社会なのだろうか。モノの生産と流通が経済利益を生み出す「産業社会」とは異なり、知識・情報・対人サービスの提供、新たな知識や理論の創造が経済利益を生み出すのが「知識社会」とされる。しかし、この捉えは「知識社会」の経済的一面に過ぎない。ハーグリーブス氏は『知識社会の学校と教師』（2015年、金子書房）の序論で以下のように明確に述べている。

知識経済は他の資本主義形態と同様に、ジョセフ・シュンペーターが述べた「創造的破壊」をもたらすものである。知識経済は成長と繁栄を刺激する一方で、人々に利潤や私欲を無慈悲なまでに追求させるために社会秩序をねじ曲げ、断片化させてしまう。ゆえに学校は、他の公的機関とともに、知識経済がもたらす最も破壊的な影響を埋める力を培わなければならない。その力とはすなわち、他者への思いやり、コミュニティ、そして地球市民としての自覚である。知識経済は私的な資本を優先的に供給し、知識社会はまた公的な資本を含む。だからこそ学校は、若者たちが私的および公的な資本をともに獲得できる場でなければならない。(p.2)

私たち教育専門職は、これからの未来を生きる子どもたちに対して、「他者への思いやり」、「コミュニティ」、「地球市民としての自覚」を培い、育んでいく必要がある。つまり、成長と繁栄を無慈悲に追求する知識経済が人々に及ぼす様々な「脅威」に対して、学校と教師、そして教育にかかわるすべての人々が対位旋律を奏でることが知識社会の教育の使命なのである。

この対位旋律を奏でるために、私たち教育専門職は「認知的な学び」と同じくらい「情動的な学び」を強調し、集団内での「関係づくり」を奨励し、「多様性」の中で「創造性」を育むことに協働で探究し、挑戦することになるだろう。この挑戦を支える一つの手がかりが「知識社会を知るこ

と」であり、もう一つの手がかりが「専門職の資本 (Professional Capital) を培うこと」だろう。  
ここで「専門職の資本」(図：専門職の資本の公式) について簡潔に紹介しておこう。

### 専門職の資本 (Professional Capital) の公式

$$PC = f ( HC, SC, DC )$$



専門職である教師にとって必要な資本 (投機可能な関連資産) には以下の3つがある。

人的資本：資質・知識・心構え・技術・情動知性

社会関係資本：信頼・協働・集団としての責任・

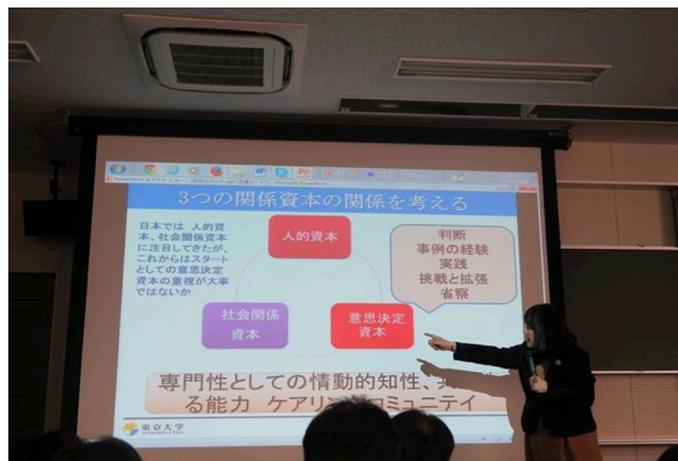
相互扶助・専門職のネットワーク

意思決定資本：判断・事例の経験・実践・

挑戦と伸張・省察

これまでの教員養成・教師教育においては「人的資本」の育成が強調されてきた。しかし、知識社会に備える教師、そして知識社会の教師には「人的資本」と同じくらい「社会関係資本」が必須となる。これは、教育にかかわる技術が洗練され、困難化する現在において、教師が専門職集団として物事を遂行し、責任を共有する等のチームワークやグループワークの必要性を示すものでもある。しかし、知識社会を乗り越える教師には「人的資本」と「社会関係資本」を個人でも集団でも培うだけでは不十分である。時事刻々と変化する状況下で、教師は自らの知識や経験や社会関係を基盤として、瞬間的に適切な行動を判断し、同僚間で学び合いながら「学び続けていく」専門職である。ゆえに、知識社会を乗り越える教師は、まさに「省察的実践家」としての「意思決定資本」を豊かに育んでいく必要がある。

本シンポジウムでは、ハーグリーブス氏の提言を受けた秋田氏が「人的資本がなければ社会関係資本や意思決定資本が育たないといった、資本の順位的獲得という誤解を避けることが大切である」と大事な示唆を与えてくださった。すなわち、「人的資本」と「社会関係資本」と「意思決定資本」は相互作用するものであり、特に「社会関係資本」と「意思決定資本」は「人的資本」を培い得る大きな「資本」ということである。福井大学教職大学院と関係諸機関は、これらの手がかりを常に探究し続け、そして教師教育カリキュラムへと統合するよう試みているところである。



(木村優)

## 5 Spring Session III 東アジア型教師像と教師教育の探究

今回初めて Zone B の中に、「Session III フォーラム特別企画」として中国の教師教育のセッションを設けることが出来た。今回のフォーラムを準備した関係で、私が全体の報告をし、フォーラムに参加された足羽高校の片桐哲也先生に感想をお願いした。

今回のフォーラムは、「東アジア型教師像と教師教育の探究—上海師範大学の研究と実践から学ぶ—」をテーマとして、2月28日(土)16時から18時までの2時間、コラボレーションホールで開催された。報告者は、①上海師範大学の教師教育の現状と課題(陸建非)、②上海師範大学天華学院の教師教育の現状と課題(郭偉奇)、③上海市教育委員会の取り組み(張進)、④首都師範大学の紹介(夏鵬翔)、⑤上海師範大学附属第一小学校での美術授業実践(濱口由美・大橋武史)の5本となり、ゲ



ストの佐藤学氏(学習院大学)のコメントもありで2時間では足りなかった。今回のフォーラムが実現した背景として、2013年3月、2014年3月、そして2014年12月の3回、上海師範大学を訪問し交流を深めてきたこと、そして2005年7月に「学術交流に関する協定」を締結し、さらに2014年3月に協定を継続したことがあげられる。今までも教職大学院の教員だけではなく、現職院生や学部卒院生も同伴して訪問してきたが、更に本格的に「教師教育」について深く学術交流を行いたいと考えて、今回のフォーラムが実現したのである。当日の参加者は約20名であったが、林福井県教育長・三田村企画官等の県教委の方々や寺岡副学長、足羽高校の片桐教諭等が参加され、内容的には大変充実したフォーラムとなったことに感謝したい。なお、中国語の通訳は上海師範大学国際処の乔易安氏をお願いした。

①陸建非氏は、(1) 世界における教師教育の背景、(2) 優秀な教員の訓練計画、(3) 本学の教師教育改革の基本状況、の3点についての報告であった。2010年に定めた中国の「国家中長期教育発展・改革計画要綱(2010～2020年)」には、「教育の大計は教員が本である。優れた教員があるからこそいい教育があるのだ」とある。上海師範大学の教師教育のカリキュラム改革としては、①現行の教師教育の公共課程の改革として、子どもの発展と学習、教育基礎及び心理健康と道徳教育という3つの学習領域をめぐって、カリキュラムのモデルをそれぞれ設計していること、②教師教育の技能訓練と教師素養の開拓を強化すること、③学科基礎を強固にすること、④師範教育類の公共基礎課程を調整すること、がある。さらに、教育実習の改革(18週間への延長と実習基地の建設強化)、及び教師陣の質の向上、教育の国際化の推進等の取組みが紹介された。

②郭偉奇氏は、2005年4月に創立された私立大学である上海師範大学天華学院の紹介をされ、工学・管理学・文学・教育学・理学と芸術学の6学問分野と25専攻があること、特に、幼児教育・小学校教育・芸術教育・応用心理学・中国語教育・日本語の専攻が教師教育に関係があると考えられる。さらに、若手教員の訓練に力を入れており、2014年9月までの64人の中層管理職のうち14人が40歳以下で22%を占めていること、若い幹部は各学部の副学部長などを担任し教学管理、行政管理などを兼任して、それぞれの部門の中で中堅となっていることが報告された。さらに、2020年までに50人の専任管理核心团队、150人の優秀専任教員及び30人ぐらいの目玉職員を養成する計画で、2010年には修士学位を持っている若手教員を35人アメリカのパシフィック大学へ派遣したとのことである。

③張進氏は、上海市教育委員会の紹介をされ、就学前教育、小中義務教育、高校などの初等教育、大学教育、職業技術教育及び成人教育、上海教育の全般を助言、指導、管轄という任務があるが、上海には直接小中高校を管轄する区県教育局があるため、上海市教育委員会は大学教育の政策指導をメインにしているとのことである。教育制度は基本的に小学校5年、中学校4年、高校3年であり、2004年から全面的に5、4、3制度を上海市範囲で実施するようになった。義務教育は日本



と同じ9年間であり、高等教育機関数は国立10校、公立37校、私立21校である。教員研修制度には様々な研修プログラムがあり、自主研修、学校でのグループ研修、教育学院(区レベルの教員研修施設)から師範系大学(華東師範大学、上海師範大学)での研修活動などがある。最後にPISA調査がトップクラスであることで、生徒達と教師達にとって貴重な経験となったことが報告された。

④夏鵬翔氏は北京市にある首都師範大学初等教育学院の紹介をされた。1954年に創立され1992年に改名、北京市教育委員会に所属、学部(学院)は25、専攻は55、修士課程・博士課程があること。養成目標は「小学校教育事業を愛する。児童生徒を理解し、それを本とする。小学校教育の意義を認識し、教師道徳を先頭とする。教師としての専門性を発展させ、教科を通して人を育て、生涯学習を続ける」

とある。教育実習は3年次が5月に4週間（郊外の小学校）、4年次が10月に6週間（市内の小学校）である。



次に、佐藤学氏が感想とコメントを述べられ、最後に⑤濱口由美氏と大橋武史氏が、上海師範大学附属第一小学校で行った美術授業の紹介をされた。それは、2014年12月22-25日に上海を訪問したときに、附属第一小学校で福井大学の美術コースの学生が授業にチャレンジをした報告であった。福井大学附属小学校の教諭である大橋氏が担任をしている附属小の子どもたちの絵画を上海に持参し、それを上海の子どもたちが見て共感・感動して非常に盛り上がった授業と

なった。学生と子どもたち、また私たちは「言葉の壁」を超えて、美術の授業は可能であるということの発見があった（詳しくは「ニュースレター第70号」（2015.02.28）を参照のこと）。以上、時間的に厳しく、報告者6名、及び佐藤氏のコメントという盛りだくさんのフォーラムであったが、これからの上海と福井の学術交流の基礎が出来たのではないかと考えている。

（森透）

## 6 参会者の声

### Zone A

#### 福井大学教職大学院非常勤講師 松井富美恵

2015年2月28日（土）、予定より20分遅れで始まったZone A : Session IIIは、今回は参加者の増加により5つの講義室に分かれて行った。今回は、昨年までと異なりこのSessionでの提案報告はなく、それまでに行われた2つのセッション、ポスター発表やシンポジウムの内容を受けて小グループで語り合う形だったが、あっという間に過ぎた1時間20分であった。午前中のSession 0を含め、午後からのI、IIと進行するにつれてわき上がってきた熱気のようなものが、そのままSession IIIに持ち込まれたように思う。そのためか、自己紹介が済むと、どのグループも以前からの知り合いのような和気藹々とした雰囲気、活発な語り合いがなされた。

私が担当したグループは、W県教育センターのU指導主事、S県高校のN先生、T県高校のY先生そして地元福井のO小学校校長T先生で、立場も校種も様々な5名のグループだった。T校長先生は名簿には載っていないが、どうしてもと参加して下さったとのことだった。まずU先生から、前年までの学校で教務主任として取り組もうとした行事等カリキュラムの精選が難しいという話があった。各参加者が聴き合い自身の学校のことを語り合ううちに共感の声とともに、何らかの改革を進めようとする時のベテラン教員の考えと若手の育成・活躍とのギャップの話題になった。「若い教員が活躍できるようにと話し合いの時のグループ分けの工夫をした」「若い教員を大事にしたいと思っていて、今日はヒントがほしいと思って参加した。秋田先生の話に興味を持った。もっと資料がほしい」「ベテランの先生は難しいところがあり皆のやる気をどう引き出すか悩む」「(ベテランは)築いた自分の枠を壊されるのをいやがり、なかなか踏み込めない」「(研究主任として)ICTを活用し、協働学習を取り入れ改革に取り組もうとしたがなかなか関心を持ってもらえない。底辺層の生徒の学力を伸ばそうとしてきた。」等、関連しながら組織づくりの難しさや悩みがたくさん出てきた。さらに進み、「(教員に)危機感がないと改革はなかなかできない。議論だけでは難しい。」「校内で信頼し、相談できる人を持つこと」「仕組みを作ってもまもなくゆるんでしまう。防ぐ仕組み

みが幾重にも必要であろう。」「地域の人に入ってもらおうようにした。」「授業を見合うことに取り組み、少しずつ進んできたが・・・」等踏み込んだ話になっていった。グループ内はミドルリーダー級の教員が多いこともあり、マナー化を防ぐことが大事、各教員の意識改革が必要、そのために仕掛けをつくろう、等々のヒントや手がかりを得られ、次につながる実践への学びになったのではないかと、参加者それぞれの表情からも感じられた。また、佐藤学先生や秋田喜代美先生の話がそれまでのセッションを受け何回も引用されていたことが、私には印象に残った。

時間になり終了の合図をしても話し合いが弾んで、なかなか終われないグループがあり、とうとう声を掛けた。同様に、どの部屋でも一歩踏み込んだ学び合いがあったのではないだろうか。今回は、一段と参加者の意識と意欲の高さが感じられた Session だった。

## Zone B

### 宇都宮大学教職センター副センター長兼教職企画調整室長 瓦井千尋

6月21日(土)、22日(日)の二日間、福井大学教職大学院が主催するラウンドテーブルに今回初めて参加させていただきました。4つのZoneと5つのセッションを貫く共通のテーマは、『実践し省察するコミュニティ』。

さて、今回私は、4つのZoneの中から迷うことなく、「Zone B 教師教育：教職大学院をイノベーションする」を選びました。その理由は3つありました。

一つは、昨今、教員養成改革を推し進める上で、特に大きな期待が寄せられている教職大学院について、福井大学教職大学院が現在どういった取り組みを行っているのかを自分の目と耳と肌とで体得したかったからです。

二つ目は、サブタイトルの「教職大学院を担う教員の資質能力向上に向けて」で議論される内容が、近々、我が宇都宮大学にとっても、喫緊の課題になってくるに違いないと想定したからです。

そして三つ目は、福井大学教職大学院への現職派遣教員の確保をはじめとする大学と県教委、地教委等との水面下における具体的な折衝をどのように行っているのか等について御教示いただこうと思ったからです。

一つ目の教職大学院の取組状況については、松木健一先生から、別途、単独でポスターセッションを行っていただき、つぶさに御説明を受けましたので、福井大学ならではの取組の状況がよく理解できました。

このことを踏まえて、私の二つ目の課題にかかわる Zone B 教師の Session II のシンポジウムに臨みました。そこでは、4人のシンポジストから問題提起や調査報告、行政説明等が行われました。特に、これまで長く教職大学院設置に奔走されてこられた村山先生(北教大)の熱い思いがヒシヒシと伝わって参りました。文科省からの認可が下りれば、来春、我が宇都宮大学にも教職大学院が設置されることになるので、大変参考になるシンポジウムでした。

引き続いて行われた Session III のフォーラムは、中身の濃い議論となりました。私と同じく県教委の次長職を退任後、福井大学教職大学院のスタッフとなられた松田先生の巧みな進行の下、文科省の森室長補佐、我が宇都宮大学と同じく来春、教職大学院の開設が予定されている大教大の富田先生、そして新進気鋭の山口東京理科大の畑中先生との有意義な意見交換ができました。

二日目のクロスセッションは、朝8時30分から午後2時までの数時間、6名の小グループの中で、3名の実践報告等を基に昼食・休憩をはさんで熱気のある話し合いの場がもたれました。教職を目指す学生・院生さんの素朴にして根源的な質疑や悩み等が印象に残りました。

二日間、大変有意義な時間を過ごすことができました。福井大学の関係各位に衷心より感謝申し上げます。

## Zone C

### 福井市宝永公民館 齊藤加奈

6月21日、22日の2日間、3度目の福井ラウンドテーブルへ参加しました。

今回は、両日とも実践報告があるということで、多少の不安を感じての参加となりました。昨年より、福井大学の履修プログラムを受講する中で、自分の実践や思いを深く掘り下げたり、語り合ったりする機会

が増えました。プログラムの中で、他の受講生の方と「伝え合う、聴き合う」を何度も繰り返すうちに、自分の中のふり返りは深みを増していると思っていたのですが、それを他者へ「伝える」ということは、想像以上に難しいものだと感じました。一日目の Zone C は、ポスターセッションに始まり、シンポジウム、クロスセッションと、様々な切り口で「コミュニティ」というものを考えたり、聞いたりすることができ、有意義な時間となりました。

Session I のポスターセッションでは、前回同様、公民館の事業を紹介したのですが、今回は大学生からいくつか質問を受けました。教育事業の区分についての質問や「教育事業と地区事業との違いは何か？」というような質問の他、「公民館で何か活動できますか」というような質問もあり驚くと同時に大変うれしく思いました。日頃から青年講座の参加者が少なく、なかなか突破口が見つからない中、突然のチャンスに戸惑ってしまい、もう少し踏み込んでアピールできたのではないかという思いが残り、少々悔やまれます。

Session II のシンポジウムは、「広報」と「記録」をキーワードに、地域に根差した情報発信の取り組みを聞きました。新聞記者と公民館という異なる立場からの実践でしたが、住民との関わり方や地域をどう伝えていくかという部分における実践者の思いや活動は共通するものが多く、冒頭でテーマとして掲げられた「学習活動の中で記録が持っている意味」というのを考える機会をもらえたと思います。特に、吉田主事が言われた「公民館の為にやっていると思われる、みなさん協力してくれない、読み手の為にしていることだということ」を何度も伝えていった。」という言葉は重みがあり、深く心に残りました。

Session III のクロスセッションでは、3月に引き続き、2回目の実践活動の報告をさせていただきました。私が公民館で行っている「夏休み囲碁教室」と、福井大学学生の探求ネットワークの活動を中心に、互いの思いや疑問を共有していきました。自分が報告者になるまでは気付かなかったのですが、私が実践の中で特に大切にしたい思いや伝えたいことに対して話すと、必ず同じグループの方から「それはどうして？」や「そのことでないといけない理由は何？」など、新鮮な反応が返ってきます。そのやり取りがまた自分の振り返りにつながっていき、ラウンドテーブルでしか味わえない経験をしているのだなと実感します。

2日目のラウンドテーブルは、学校教育の関係者が多いイメージがあり、最初は戸惑いしましたが、3日目となるとそれも楽しみの一つとなってきました。受付を済ませ、座席とメンバーを確認すると、3月に同じグループになった方と再び同じグループになっており、思いがけず再会を果たすことができました。2日目は、1日目以上に、地域も世代も分野も様々な方たちとの交流なので、初めは何とも言えない緊張感がありましたが、必ず、張りつめた場が和む瞬間があり、今回もそのような瞬間を機にグループとしての一体感が生まれ、昼食時間も意見を交わしながらの時間となりました。

今回のラウンドテーブルも、ここでしか味わえない貴重な時間を過ごすことができました。ラウンドテーブルは、同じテーブルになったメンバー同士で、お互いの実践紹介を交えながら濃い時間を共有するのに、時間が来れば、ぱっとそれぞれの分野へ戻っていく、そのような非日常の経験があるからこそ、また、日々の実践活動を通して成長していくことができるのではないかと考えています。

(『福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」Newsletter No.32』, 18-19 頁より抜粋)

#### お茶の水女子大学社会教育主事講習受講生 坂本一馬

今回で2度目の参加となった福井ラウンドテーブル。実践報告者として参加した私にとって、「支援者としての自分の立ち位置」がどこなのかということを再確認したラウンドテーブルとなった。

今回私は、東京都杉並区で社会教育専門嘱託員として担当しているいくつかの青年活動団体の中間支援の実践について報告した。特に、私の支援のあり方を「共に創る」ことへ転換している実践について報告したのだが、なんと他の報告者の方も「学びあい」という“上意下達・一方通行ではない”という点で、私と近いテーマを報告されたのだ。その方は小学校の教員をされている方で、教師の一方的な「教え」ではなく、子どもたちの「学びあい」で授業を運営できるのではという思いで実践しているようだ。

このラウンドテーブル自体も、「実践し省察するコミュニティ」というタイトルで開催している通り、互いに学びあうコミュニティをどう形成していくのかということが大きなテーマといえるだろう。その点では、社会教育を専門としている私と小学校教育を専門にしている方で、「共に創る」「学びあい」という近いテーマが話題になることはある意味当然なのかもしれない。

けれども、違う専門領域での実践ならば、その違いはどこに表れるのだろうか、帰りの新幹線の中で考えてみた。

それは、立ち位置の違いではないだろうか。学校では教員と子どもという直接の関係であるのに対し、私

はコミュニティを通して間接的に活動者を支援する立場だ。とすると、「学びあうコミュニティ」がより良くなるためにさらに「学びあうコミュニティ」をつくるのが私の役割だ。と、ここまで考えたところで東京駅に着いた。

このラウンドテーブルでの発見をきっかけに、現在中間支援のあり方について再検討を行っているところだ。これまで私が「支援」であるといっている行って来たことを洗い出し、かつ、活動者にとっては何が「支援」であったのか、支援側と活動者側の双方向で整理を進めている。検討のスピードは鈍行列車なれど、「支援」ということの根元的な問いを持ちながら、着実に「共に創って」いきたい。

(『福井大学教職大学院 Newsletter No.65』, 6 頁より抜粋)

### 福井大学教育地域科学部社会系教育コース 3 年 寺島亮太

今回、私は実践研究福井ラウンドテーブルに参加した。今回で 3 回目の参加であり、報告も 2 回目だった。今まで参加してきて、私が発表するしないにかかわらず、何かしらの学びを得てきた。もちろん、今回も同じであり、とても有意義な時間を過ごすことができた。以下、簡単に 2 日間で得た学びについて述べていきたい。

1 日目は、Zone C に参加した。「持続可能なコミュニティをコーディネートする」というテーマの下、ポスターセッションやシンポジウム、クロスセッションに参加した。ポスターセッションでは、私が実践している探求ネットワーク（以下、探求）や、公民館の報告を聞いた。地域に根差した公民館活動の報告は興味深いものであった。またシンポジウムでは「コミュニティをひらき支える広報と記録」ということで、いかにして地域の理解を得て、それを記録し、広報していくのか、そのあり方について考えさせられた。そして、クロスセッションで私は、実践していることについて報告した。2 日目は、1 日目の Zone に関係なく少人数に分かれての実践報告だった。この場でも、私は報告した。大学教授や中学校の先生もいらっしや、有意義な時間を過ごすことができた。

さてここからは、報告の中で具体的にどのようなコメントを得られ考えたことについて述べていきたい。まず、探求の知名度の低さである。今年度探求は 20 年目を迎え、規模も大きい組織となった。しかし、それでもこの実践を知っている人は少なく、県内の先生や公民館の方たちでさえ「福大ではこのような実践がされていたのか」と、あまり知られていない。これは、とても残念なことである。しかしこの現状は、これから探求がよりよい組織になっていく可能性があることを示している。ここで広報の在り方をとらえ直し、よりよく探求の情報を発信していけば、今までにあまりなかった公民館や地域の方々と連携した活動というものを創りあげることができるのではないか。このラウンドテーブルも、その広報の場の 1 つとして捉えることができる。この場で探求を発信することで新たなつながりが生まれ、双方にとっていい影響が生まれるに違いない。実際に今回参加してある公民館の方とつながりができ、私が所属するかみすきブロックが地域で講座を開くことが決定している。このようにつながりが生まれれば、より探求が広く認知され、地域に支えられる組織へと発展していけるのではないか。その可能性について、改めて考えさせられた。

では、どのようにして探求を発信していくのか。発信する場としては、このようなラウンドテーブルなどの場で行えばよい。しかし、単にポスターにまとめて発表するだけでは不十分だと考える。そこで重要となってくるのは、実際に活動している私たちスタッフの実践記録だ。探求での実践を通して、子どもたちはどのような力を身に付け、スタッフはそれにどのように介入し、学んだのか、そして意味づけをしたのか。それを記録化し、発信していくことが今後より一層求められると思う。今回私が報告していくなかで、「どうやって、子どもの学びを記録している？」「あなたが今までの実践を、どう意味づけしてきた？」と聞かれることがあった。このコメントに対して、私は自分の考えを上手く伝えることができなかった。これは、私がしっかりと今までの実践を意味づけし、記録化できていなかった証拠である。探求での実践は、これからの自分にとってためになるものである。それなのに、今の段階ではそれを自分のものにはできていない。今回をきっかけに、いかに自分の学び、子どもの学びを意味づけしていくのか考え、それを記録化していきたいと感じた。

さて、以上が今回ラウンドテーブルに参加して得た学びである。いつも感じることだが、こうした学びというのは、探求内だけでは気づかないことが多い。視点を変えて捉えてみると、新たなことに気づくことができる。だからこそ、今回のような場での情報発信による、外部の視点を大事にしていきたい。

最後に、春サイクルについて述べていく。ラウンドテーブルから 2 週間、春サイクルの集大成であるミニなかまつりが開かれた。ここでは、子どもたちが日ごろの活動の成果を他のブロックや保護者、地域の方に

発表する。子どもたちにとって普段経験しないことでありいい機会であるが、なかなかうまくはいかない。そこでスタッフとしては、雰囲気づくりを大事にしていきたい。子どもたち、特に自分のブロックの子どもたちにとって、発表することに対して苦手意識を持っている。そのような子たちが発表できるようになるためには、安心できるような雰囲気を作ってあげることが大切になってくる。発表を聞いてくれる環境、失敗しても大丈夫だと思えるような温かい雰囲気、発表がしたくなるような雰囲気。そのような中で、子どもたちは普段と違う活動にも、勇気を出して取り組んでくれるのではないかと、3年間活動してきて見えてきた。今年度の春サイクルの子どもたちは、昨年度までとは少し違う、成長した姿が見られた。そのような姿を見られたことをうれしく思うと同時に、それらをもっと磨いてよりよいものにしていきたいという願いを今持っている。春サイクルでの学びをこれからの振り返りで意味づけ、さらには記録化し、夏サイクル以降の活動へとつなげていきたい。

(『福井大学教職大学院 Newsletter No.65』, 6-7 頁より抜粋)

## Zone D

### 福井市森田中学校教諭 南部隆幸

「学校現場はこれほど忙しいものか」と五年ぶりに教育委員会から中学校に戻って実感している。1人1人に対する手厚いケア、学級集団に合わせた授業設計、質の高い授業を目指した時、教師の仕事に果てはなくなる。毎日の子どものやりとりの中で、今まで持っていた授業に対する見方・考え方が絶えず揺さぶられる。あたかも、どんぶりの中に入れた水が溢れんばかりに波打つようだ。学校で日々の授業をこなすだけでは溢れそうな水を心配するだけの繰り返しになるが、今回、ラウンドテーブルで「授業の問い」について発表の機会をいただいたことは、「えい、やっ」とどんぶりの壁を乗り越える良いチャンスとなった。

言葉にすること、語ること、文にまとめることは、教師として新しい器を得るために大きな意味を持つ。さらに、小グループでは自分の話を聞いてくれた方々から、いろいろな意見を聞くことができた。中には対立する鋭い意見もいただいた。自分の授業観がさらに深まるのを感じる1日となった。

### 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校教諭 柳澤秀樹

Zone Dで、「授業改革の扉を開く」というテーマで、本校の「縦割り集団での学びを深める」という研究について、ポスター発表させていただきました。

全校縦割り班活動の始まりから現在の「レインボータイム」に至るまでの流れや過去2年間の研究をいろいろな班の活動写真や図表を見せながらお伝えしました。

昨年度から取り組んでいる教師の「しかけ」では、「縦割り集団の学びを深めるために、教師がどんなことを子どもたちに願って働きかけているのか」という質問を香川県の小学校の先生からいただきました。その中で、子どもたちの発達段階ごとに「培いたい力」を整理しながら、縦割り集団の学びを意識して研究していることを説明しました。縦割り集団での活動が、通常教育の中でも重要視されていることを改めて感じました。

### 勝山市立荒土小学校教諭 大塚雅洋

ラウンドテーブルには、2014年3月と6月の2回参加しました。最初は1回だけ参加するつもりでしたが、紹介された実践例を数人グループで多面的に分析したり、自分の実践と比較したりしながら、議論を重ねていく面白さに興味を持ちました。討議するメンバーは校種や専門教科が違う教員で構成されているため、自分が取り組んだことがない実践を参加者から知ることができたり、『学び』の共通点に気がついたり、自分の考え方やものの捉え方を深めることができました。2回目の参加は、自分が現任校で行ってきたICT機器を活用した実践を発表してほしいという依頼がきっかけでした。普段の授業の中でICT機器を用いて視覚に訴える授業をしてきました。特に、理科では、身近な環境を記録したオリジナル教材を作成し、児童に自分たちが生活する地域の自然と生き物の命のつながりに関心を持たせる実践報告をしました。発表後、多くの先生方から「すごい」という高評価をしていただいたことは、自分自身の励みになりました。これからもICT機器を活用した授業や教材を作成し、児童の興味関心を引き出す授業を考えていきたいと思えます。

#### カリタス学園カリタス小学校教諭 加藤木智子

1日目は「Zone D授業」に参加させて頂き「質の高い学びを生む問いとは？」というテーマのもと実践発表を、2日目には小グループで実践の語り合い、聴き合いをさせて頂きました。自分の実践に対し、テーマに即して的確な意見を絞り、分かり易く語ることの難しさを実感しました。同時に、実践を振り返り語り合うことやそれに対する質問に答えていくこと、他の先生方の実践や様々な考えを聞くことで、自分自身も教育観にも改めて気付かされました。

また、自分とは校種や立場が全く異なる方の多様な実践報告であっても、聴き合い、語り合う中で、「自分のあの時の実践と重なる部分があるな」「あの時の悩みと似ているな」「あの時のあの子の反応と似ているな」など、共通性が見えてくるのが大変面白かったですし、良い学びとなりました。更に、自分も頑張ろうと良い刺激を頂きました。

「質の高い学びを生む問い」とは何か、今後も自分自身に問い続けていきたいと思えます。

#### 福井県教育庁義務教育課授業力向上グループ理科指導主事 三崎光昭

豊富な経験と学び続ける意欲にあふれた先生方の熱心な協議に参加させて頂き、充実した時間を過ごさせて頂きました。特に山梨県の古屋和久先生の言葉は、実践に裏付けられた重みと説得力がありました。

『質の高い問いは質の高い学びを生み、質の高い授業となる。質の高い授業を受けた子どもは、授業で考えたことを家に帰って保護者に語るようになる。保護者は子どもの学校での様子が分かるようになり、子どもの成長を感じるとともに、学校への信頼感をもつようになる。授業について子どもが自分の言葉で語ることは、学校にとって1番の発信力となる。○○通信やHPも良いけれど、

子どもの言葉ほど影響力の大きいものはない。』学ぶことに夢中になっている子どもと、保護者が学びに参加している姿が目に見えようでした。

古屋先生だけでなく、多くの先生方が、このラウンドテーブルで、自分たちの実践を語り合い、刺激し合う。実に質の高い時間が流れていました。

#### 嶺南学園敦賀気比高等学校美術科講師 滝田知佳

〈私達はなぜ学ぶのか。〉人は、自分のすることの意味を問い続ける生き物です。教師、または教師を目指す私達にとって「質の高い学びを生む問い」とは、日々の悩みであり、同時に大きな可能性につながる学びの根源でもあります。年齢や職業、地域、教科の枠を超え、Zone Dに集まった私達の熱意の渦は、まさに一つの方向性を生み出そうとしていました。

〈子どもたちの『その先に続く学び』とは。〉

今回の対話の中で行き着いたこの問いの中に、本題の核心をつく重要なキーワードが隠されているように思えます。私達はもう一度、この問いを教師自身の問題として捉え、それぞれの現場に持ち帰ることによって、さらに具体的なActionを生み出していく必要があります。

教師という学びのプロとして、目の前の子どもたちに何ができるのか。この研究会に参加させて頂くことで、日々の忙しさの中に置き去りにされていた大切なことに改めて気づくことができました。これから挑み続ける教師でいたいと思えます。沢山のエネルギーをいただき、本当にありがとうございました。

#### 身延町立大河内小学校教諭 古屋和久

夏と冬は各地で開催される研究会にお声をかけていただくことが多いのですが、実践研究福井ラウンドテーブルには、初めて参加させて頂きました。

私が感じたラウンドテーブルの最大の魅力は、一つひとつの授業実践にじっくり向き合えることです。実践の内容はもちろん、実践者である教師の教育観、これまでの

教師としてのあゆみ、お人柄にも向き合うことができる研究会だと感じました。2日目のクロスセッション、1日目の研究会と、少ない人数でテーブルを囲み、共有した

実践を通して、聴き合い、語り合うことができました。学生さんや院生さん、研究者、教育委員会で指導的立場にいらっしゃる方、現職教師など、テーブルを囲む一人ひとりが、同じ立場で参加し、自分の言葉で語り合う場は、教師としての自分自身に向き合う場ともなります。

このような研究の場を、福井大学教職大学院が提供していることも重要だと考えます。教師は、現場で出会

った「問い」を、「教育現場」という閉じた世界の中だけで考えるのではなく、アカデミズムの世界につなげながら、その答えを探求していくことが必要だと思います。教育現場とアカデミズムの世界との出会いの場としてのラウンドテーブルに、大きな魅力を感じています。

#### 福井大学教育地域科学部美術教育サブコース2年 山田夏乃

私達は、美術科教育法Ⅰの授業で中国、フィンランド、日本の美術教育を比較検討した結果、最終的に「美術教育は『生きる力』に必要なのか？」という疑問に行き着いた。担当の濱口先生は「この間に美術教師は答えられなければならないよね」とおっしゃり、後日、私達は今回の授業の内容をラウンドSessionⅠという大きな場でポスター発表を行うことになった。

今回の発表、ラウンド参加は、私達が美術教育の根幹と深く関わるきっかけになったと強く感じる。さらに、多くの達成感と充実感、さらにそれに伴う疑問を得ることができ、今回は特に強く感じたことを述べていきたい。

まず、ポスター発表で大事にしたことは、上記で述べた3国の美術教育の違いを見ている人に気付いてもらうことである。「あなたはどこの国の美術教育を受けてみたいですか？」とポスターに大きく提示し、発表の中でも見ている人にも積極的に問いかけることで聞いている人にもより深く3国の違いとそこから分かる日本の美術教育の特徴を考えてもらうというねらいをもって臨んだ。

発表の際、気づいたことは、こちらからの問いかけに対して、聞いている人はあまり反応してくれなかったことだ。「この教科書をみてどう思いますか？」と聞いた時、返してくれる人もいたが、こちらが当てるが多かったように感じる。

また、聞いている人にどこの国の美術教育を受けたいか？と問いかけることで、私自身も発表を聞いた人がどう思うのか聞いてみたかったが、残り時間とこちらの問いかけが不十分で引き出すことができなかった。その二点が非常に残念で心残りであったので、今後の展開に活かしていきたい。

また、SessionⅢの場では、「美術は『生きる力』に必要なのか？」という問いかけに似た「先生。なんで美術ってせなあかんの？」という子どもの声をきっかけに授業の見直しを行なった、滝田先生の実践記録を検討する時間があった。それは、自分達の疑問にもあった「美術は『生きる力』に必要なのか？」という問いかけにとっても似ていたため、自分自身と照らしあわせてその疑問を考えることができた。私が今強く感じているのは、子ども達に「こういう力をつけてほしい」と願うのなら、子どもたち自身の学びの初期段階にある「なんでこれ勉強せなあかんの？」という問いを邪険にせず、応えることが大事だということである。では「何故美術をしなければいけないの？」「美術は必要なのか？」という問いに後ろ向きになるのではなく、私はその都度丁寧に応えたいし、自分自身にも常に問い続けていきたい。

#### 福井大学教育地域科学部美術教育サブコース2年 三好愛

今回私たちは「あなたはどこの国の美術教育をうけたいですか？」をテーマにポスター発表を行った。たくさんさんの現職の教師の方々を目の前にして教育について話す、ということもあり、これで通じるのだろうか、本当は間違っているのではないだろうか...と不安と緊張が入り混じっていた。そうした不安要素を取り除くためにも、毎日あぁでもない、こうでもない発表メンバーでの話し合いが続いた。思えば、こんなに同学年の仲間と美術教育について話をしたのははじめてではないかと思う。私たちは普段美術教育サブコースという場所に所属し、共に生活をしているが自分の制作について語り合うことがあっても、教育についてなかなか話し合う機会は少ない。みんなひとつの物事に向き合い考え、答えが出た！と思ったらまた話していくうちに疑問が生まれ、そして本当にそうなのかと話していくうちにまた新しい疑問が生まれていく...というように持続的に疑問をもち続けていく時間になった。それはまるで持久走のようでとても体力が必要で辛いのだが、進めば進むほどははじめは全く見えなかったゴールに近づいていく感覚が自分のなかにありとてもわくわくした。

セッションの中では「質の高い問いを生む授業とは？」をテーマに現職の先生方のなかに混じり考えていった。私はまだ教師として児童の前に立ったことがないので、教師側の視点というのは聞いた話や想像でしかない。そのため今までの自分はまだ実践経験がないから...よく知らないから...という理由でどことなく遠慮してしまい、問いと真剣に向き合うことから逃げていたのではないかと思った。今回のポスター発表を通して分かったのだが、自分が真剣に考えて見つけた意見だからこそ聞いてほしい、間違ってもいいから伝

えたい、という思いが出てきて話し合いの中に飛び込んでいけるのではないだろうか。今あるこの環境が、問いが、自分自身の問題としてきちんと受け止めることが出来たというのは大きな収穫となった。

また、ポスター発表をするまでは、これだ！と納得できる答えが自分の中にあったのだからいろんな先生の話聞き意見を交わせば交わすほど、どんどん新たな疑問や感情がわいてきて、本当に自分が思っていたことは正しいのだろうか？もっと違う何か見出せるのではないだろうか？と疑問がわいていきた。これからもっともっと、美術はもちろん教育というものの中にもぐってみたいと思いました。

#### 福井大学教育地域科学部美術教育サブコース2年 中村葉

Session II・IIIの私のグループは現役の教師の方が3名、私を含め学部生が2名で、ほぼ教師の方3人で話しが進められていて、私たち学部生は話を振られたら答えるということを繰り返していた。特にSession IIでは、まだ授業者の立場に立ったことのない私たちには入ることができない内容であり、私は3人の話をただ聞いているだけでいいのだろうと複雑な気持ちでいた。

そんな気持ちで迎えたSession III。滝田先生の話で複雑な気持ちも吹っ飛んで行った。滝田先生は私たち美術科4人が本当は伝えたかった「美術って必要だと思いますか？」という質問を堂々と投げかけたのである。

まだ滝田先生がどのような話をするかわからなかった導入のときに、先生は「続きましてっていうのが学生のとき嫌いだったので1分後に私話し始めますのでみなさん好きにしてください」という発言に衝撃を受けた。この人は学生の頃の気持ちを忘れていない、と思った。特に、最近の私は、授業者の立場でしか考えてないような気がする...という考えを持っていたのでとても驚いた。そして、「なんで美術するの？」と、でかでかとスクリーンに映し出され、この人すごいなと感覚的に感じた。滝田先生の実践や話を聞いていくと教育学部を出ていないからこそできる活動だったり、子どもとの関わり方が見えてきたりした。私はこの学部へきて、自由な発想が、色々な文献や資料などの検討によって縛られていく感覚に去年から陥った。だから滝田先生の自由な発想や楽しそうに授業する様子、子どもたちとの関わり方が本当にうらやましく思えた。私もいつまでも縛られていないで初心に帰らないといけなくて心から感じた。また、自画像の話をしている中で思ったことは、先生の美術に対する、教育に対する固定概念を一回外すことで子どもの目線が見えたり、子どもの表現の幅が広がったりするのかもしれないということだ。

滝田先生の「なんで美術が必要なの？」という問いはあの教室にいた全ての人の心を動かしたように感じた。始まりのとき関心なさそうに前を向いたり、下を向いていたり何かしていた人たちが全員顔を上げて滝田先生の方を見ていた。その光景をみて、「もしかしたらこの考えを広げていったら今の日本の教育が変わるかもしれない」と感じた。

最後に生徒達から滝田先生への文章を読んでいた時、「美術って必要なんだ、よかった」と私もうれしくて泣きそうになってしまった。

そのあとグループへ戻ったとき、初めにあったへだたりがなくなり全員同じ土俵で話ができる雰囲気になっていた。そこでグループの教師の方に「美術は必要だと思う」と言われて、これから頑張っていこうと思った。

「なんで〇〇は必要なのか？」という質問を改めて考えることが、質のいい、子どものための授業づくりに繋がるのかもしれないと感じた。私も常に、美術はどうして必要なのか、という問いを持ち続けると同時に初心を忘れないことを大切にしようと思えた、とても学ぶことの多い時間だった。

#### 福井大学教育地域科学部美術教育サブコース2年 西本晃生

今回のセッションを通して現職の先生も子どもに良い授業をできているか悩んでいるということが分かった。彼女らの話を聞くと、「～をしよう、できるようになろう」という目標を設定した授業ばかりをしていたので、「～できるのだろうか」と問う課題設定をする授業の話聞いて驚いたそうだ。それを聞いて美術の授業でどん

な「問い」をだしていけるのか疑問に思った。

滝田さんの話を聞いて、美術はなぜするのかという「問い」や「じっくり」と「思い切り」の2つの展開などは、ポスター発表の時に自分たちの話の中でた疑問と悩んでいることが同じであり、自分たちの課題は現場の学校と繋がっていたのだと思った。自分たちの考えていることがこれからの授業づくりに活かされていくのだと感じた。美術がへたで嫌いだったという先生がいて、そこから子どもの頃は楽しいだけで満足できるが大人になると技術を使って伝えたいから生まれる葛藤ではないかという意見が出た。滝田さんのク

ラスにも嫌いな人がいたがこれに通じていると感じた。

最後に質の高い学びを生む問いについて考え、私の班では先生が子どもから気付かされる、先生も子どもから学んでいく授業から質の高い学びが生まれるという結論が出たがまだ納得がいかずまだよく分からないまま終わった。また最後に「良い先生になってください」と言われたので「どんな先生が良い先生なのか」と聞き返したら、「情熱をもって学んでいく先生」と答えられた。

今回のセッションを得て大学でやっていることは現場とも繋がっていて生かされるのだと気づけた。これからの課題として美術が身近でないから敬遠されがちだという滝田さんの話を聞いてポスター発表からでた自分たちの課題をより一層展開していきたいと思った。また美術の問いとは何か探していきたい。

#### 茨城県牛久市立下根中学校長 岩田博

正直私は、ラウンドテーブルが何を意味するのかさえほとんどわからないままの初参加だった。福井の美味しい蟹でも食べに行く程度の軽い気持ちで参加したのだったが、その思いは大きく裏切られ、学びの多い2日間になった。

初日の Zone D Session I で私は下根中学校の授業づくりについてポスターセッションで発表した。まず発表テーマの幅の広さに驚かされた。大学なのだからそれは授業づくりについてはかなり内容を絞った専門的な発表会になるかと思いきや、音楽教育から観察の授業と何でもありの太っ腹。その後のセッションⅡ、Ⅲでもあらゆる分野の先生方とグループを組んでの話し合い。それなのに全く疎外感を感じることなく、共に学び合うことができる懐の深さと温かさがそこにあった。夜ホテル前の居酒屋で仲間と飲みながらラウンドテーブルでの学びを振り返ることができた。越前ガニは高くて手が出せなかったが、ズボガニはとても美味しくいただけた。

そして、2日目も全く異なる分野の方たちと、まさに丸テーブルを囲んでたっぷり半日間の語り合い。最後はその日初めて出会ったグループのメンバーが、あたかも昔からの同僚のように笑いながら学びを交わすことができた。まるでごっちゃ煮のような学び合いの場。それが福井ラウンドテーブルの本質なのかもと気づいたときにはあっという間に時間が過ぎて終わっていた。福井大学恐るべし。

#### 身延町立大河内小学校教諭 古屋和久

「大きくて小さい研究会」。実践研究福井ラウンドテーブルの魅力を一言で語るとしたら、この言葉がぴったりだと思います。ハーグリーブス先生の「知識社会の教師の資本」という大きな教育の世界に出会うこともできれば、1時間の授業という小さな教育の世界にもじっくり出会うことができました。参加者が非常に多い大きな研究会ですが、6人という小さなグループでじっくり語り合うことができるのもラウンドテーブルの魅力です。

6月に続いて2度目の参加になるわたしは、教師が日常的に行っている小さな教育実践を例に、「教室文化」という大きな話をさせていただきました。2日目のクロスセッションで報告された実践は、個人や学校(大学)、県という小さな単位で取り組まれたものですが、「教育」という大きな世界や「日本社会」の抱える大きな問題、「豊かさとは何か」「いかに社会に貢献すべきか」というような大きな問いに向き合うことができました。

わたしの発表した「学び合う教室文化」を育てる実践について、鹿児島大学や福島大学の学生さんたちとお話しする時間がとれました。彼ら・彼女らの教育に対する真摯な思いの一つでも小さな灯りをともしることができたなら嬉しく思います。やがてそれが、研究や教育実践上の大きな「力」になってくれることを願わずにいられません。

#### 埼玉県立新座高等学校教諭 深見宏

東京駅から3時間半。新幹線と特急を乗り継いで福井大学へやってきた。総合研究棟の窓から見える山脈は雪でまだ白い。出発地とは質の違う寒さの福井市にあって、ラウンドテーブルの会場は全国から集まった教育者の熱気で充満していた。

そんななかで、「解放して伝える 使って残す」をテーマに、生徒のなかに学びを残すための授業実践と、授業方法から一步戻って伝わる状態を整えるということ、学びの内容を使う場面を想定することで残していくということについて発表させていただいた。

内容は、生徒を解放することで他の生徒や教師へ考えを発信し受け取ることができる状態をつくり、生徒の力で内容を濃くしていく授業を行うことで記憶を「エピソード」にまで引き上げる。そこへさらに授業で学んだことの使用場面を想定させることで、生徒が実生活で授業から学び取ったことを使用する場面に気づきやすくなる。教室の中のつながりの網目を細かくするための会話や、学んだことを使用する場面の想定は、生徒と教師お

互いのなかでフックとなり学びの残存濃度を増すことにつながるというものだ。

これに対して会場の方々からは、生徒の状態やフックに対して様々な感想や質問が挙がった。これらを聞き深めていくなかで、生徒ばかりではなく教師の側も授業方法の選択や生徒理解に対して閉じている部分があったのではないかと。教師同士も互いに対話し授業や生徒に対するフックを多くもつことで網目が細かくなりより効果的な授業が提案できるのではないかとということが見えてきた。

また、実践報告で隣り合った先生から出た「自分もあの先生の実践を取り入れた指導をしたのだけれど、どうしても自分には合っていない気がする」という言葉や、翌日のラウンドテーブルで出された「教育の地域性に胸を張っても良いのではないかと」という言葉からは、良いと言われている実践を画一的に取り入れるのではなく、教師のパーソナリティに合ったやり方をその地域に住む生徒（あるいは生徒個人）の特性に合わせて提供することが教育の効果を高めることにつながるのではないかとという考えが浮かんだ。山脈を越えて3時間半も離れているのである。関東と北陸でもこれだけの時間がかかるのだから全国の学びの場に存在する教師や生徒の質にも多様性があるはずだ。

生徒と教師をつなぎ、かろやかな発想で地域や生徒の状況学びの要求に合った教育方法を選択する。そのような新たな教師像を今回の報告会から手に入れることができた。聞いてくださった方のなかにも明日の教育に対するヒントを残せたならば嬉しく思う。

#### 福井県小浜市教育委員会指導主事 加福秀樹

授業改革の扉を開く～教師は授業sで何を残したいのか～に参加し2つのことを感じました。

1つは「学び合いの土壌づくり」の重要性です。学び合いは分からないことを分かろうとする「なんで?」「どういう意味?」などの問いから生まれる。問いは自分の考えを持つことから生まれ、学び合う教室文化の上に成り立つ。この両面をバランスよく形成していくことの大切さを再認識できました。

2つ目は「学び合うことの心地よさ」です。グループ内での意見交流は多くの刺激があり、聴きあうことが心地よく感じました。そのせいか時間とともにメンバーの関係性は強まっていきました。まさに子どもに味わわせたい気分を味わっていました。

また、学び合う中で自然と自分の実践をふり返り、「自分はなぜ教師になったのか」「教師になって何がしたかったのか」を自問自答していました。私自身の教育観を再確認し、今後「何を残したいか」が見えてきたような気がしました。

気がつけば Zone D は「学び合う心地よさ」と「原点回帰している自分」を私に残してくれていました。何を残すかも重要ですが、いつのまにか心に残せるこの腕前こそ私が一番学ばなければならないことなのかもしれません…。

#### 茨城・学びの会代表 岩本泰則

今年度4月、「茨城学びの会」で共に学んだ小林和雄先生が福井大学大学院の准教授になった。福井ラウンドテーブルの魅力も熱く語る彼の誘いにひとつ返事で参加した。そこにはこれまで参加した研究会とは異質なものがたくさんあった。参加者の多様さもそうであり、会の趣旨がしっかりと明記され、それが確実に実現されていることもそうである。

例えば「Zone D 授業改革の扉を開く」、いきなり発表ではない。コーディネーターは、6人グループになっている参加者に、自己紹介代わりに、これまでに受けた印象的な授業について語り合うよう求めた。これで雰囲気はガラッと変わった。柔らかい身体になったところで古屋先生「学び合う教室文化をつくる」の発表になったので、活発に考えを交流できた。会の締めくくりでコーディネーターは、各人がどのような学びをしたのかをグループで語り合い聴き合うよう求めた。しっかりと、省察する時間をとっている。

二日目は、round table cross sessions, 5人とも職種が皆違うグループのメンバーが、約5時間にわたって、報告し合い、聴き合い、訊き合う時間となった。これまでにこんなに充実した時間はあったであろうかと、ラウンドテーブルでも学び合いの質の高さに驚いた。大学生とも語れた。参加者の中では多分、私が一番年上であろうが、この二日間でたくさんのエネルギーを頂くことができた

そして、約40年前、教師になった頃、書物の世界で懂れていた数学教育の研究者、山野下とよ子先生との出会いは感動的であった。主催者の皆さんに感謝である。

# 第3章 2014年度各地域で開かれたラウンドテーブルの事例

## 1 教育実践研究フォーラム @ 長崎大学

### (1) 概要

10月に長崎で行われた国体の熱気を残したまま、11月8日(土)・9日(日)に長崎大学にて教育実践研究フォーラムが開催された。今回のフォーラムは2014年3月に開催された「教員養成機能の充実に関するシンポジウム」の続編としての開催と、数年継続して展開されている「教育実践と省察のコミュニティ」との開催を兼ね、2日間のプログラムで行われた。学び続ける教員が求められている時代の中で、教育実践研究はどのような布置になるのか、教育実践に関わる複数の組織の連携とは、といった課題のもとで、テーマが「教育実践研究における連携の在り方を探る」と設定された。

1日目はポスターによる成果報告と基調講演、シンポジウムを通して教育実践研究について話題提供がなされた。2日目のラウンドテーブルについては長崎では初めての取り組みであったが、教育実践研究に関する話題を報告し、聞き合い語り合うことで、参加者が自己の資質や能を高めていく省察の機会となった。

参加者は150名程度であった。具体的なプログラムは下記の通りである。

#### 11月8日 教育実践と省察のコミュニティ 2014

10:00～12:00 ポスター発表による研究成果報告

教育学研究科教職実践専攻研究成果:平成26年度修了予定大学院生  
教育実践研究成果:大学教員,附属学校園教員,研究協力校教員 等

13:00～17:20 基調講演・シンポジウム 「教育実践研究における連携の在り方を探る」

基調講演

教育実践研究に期待するもの 森 次郎(文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室)

シンポジウム

大学教員と附属学校園及び地域の学校等との連携研究の現状と課題

-小学校・中学校の教育に関連して-

藤本 登(長崎大学教育学部)

-特別支援教育に関連して-

寺田 信一(高知大学教育学部)

附属学校園間の連携研究の現状と課題

森 浩司(長崎大学教育学部)

附属学校と教職大学院との連携研究の現状と課題

松木 健一(福井大学教育学研究科)

教育委員会が連携研究に期待するもの

原田 尚之(長崎県教育庁高校教育課)

17:30～19:00 懇親会

#### 11月9日 実践研究長崎ラウンドテーブル

(藤井佑介)

### (2) 参会者の声

#### 福井県立藤島高等学校教諭 野尻友佳子

博多から2時間弱、「特急かもめ」が終着駅長崎へと近づく頃。長崎出身の歌手さだまさしの「天までとどけ」が流れ、続いて「長崎へようこそ」といったアナウンス。いやがおうにも旅情が高まる11月8日土曜日。私は列車に乗って各地を旅することが好きですが、今回の長崎でもたくさんの収穫がありました。多忙な日々の中でも時間を作って違った土地へ出かけることは、教師という仕事にとってたくさんの

プラスの要素を与えてくれます。1日目は「教育実践と省察のコミュニティ 2014」と題して、ポスター発表、文科省高等教育局の森氏による基調講演「教員養成の改善・充実について」、5名の発表によるシンポジウムが行われました。われらが松木 健一先生の発表時には、参加者たちのうなずきや共感の反応を感じ、自分のことのように得意げになってしまいました。夜は、長崎出身の藤井先生のご案内により、福井組総勢12名で「中華街」でのおいしく楽しい時間を過ごしました。ちゃんぽんに皿うどん...、長崎には名産のおいしいものがたくさんあります。短い自由時間を有効に使って、次々に復元が進んでいる「出島」の見学にも行くことができ、満足の1日目が終了しました。さて、翌日曜日は、ラウンドテーブルの日です。朝のわずかな時間に平和公園に立ち寄ることにしました。有名な平和祈念像を目にするのは、自分自身の中学校時代の修学旅行、教員になってからの修学旅行引率に続いて今回が3回目でしたが、今回ほどいろいろなことを考えたことはなかったように思います。平和祈念像の他に旧浦上天主堂遺壁、母子像なども眺めながら、平和を思うことの大切さを実感した有意義な朝でした。思いのほか時間を使いすぎたため、急いで路面電車に乗り、長崎大学に到着。ラウンドテーブルは福井大学でのものと同様の形式で開催されました。私のテーブルは6名。ファシリテーターとして長崎大学の教授。報告者は私の他に、長崎大学教職大学院生の中学校の先生。聴き手として、准教授、ストレートの院生2名、という構成でした。福井大学でのカンファレンスやラウンドテーブルを何度も経験していると、それが最上のものだと思ってしまうのですが、やはりいろいろなやり方を見て客観的視点を忘れないようにしなければならないと思わされます。長崎大学の教職大学院のシステムは、福井大学とはかなり異なっています。1年目は勤務校を離れて大学院で研究に専念し、2年目は勤務しながら研究を続け、論文にまとめる、といった形のようなのです。私のグループで発表された先生は、通級指導のご経験から、授業における生徒の「課題非従事行動」を観察し支援にスムーズにつなげる研究をなさっています。通常学級においても必要な視点であると考えさせられる興味深い研究でした。お二人の長崎大学の先生からは、専門的見地から批判的視点も有したアドバイスをいただき、自らの価値観にとらわれずに立ち止まって考えてみることの必要性を再認識することができました。ストレート院生の二人も明るく意欲的で、おおいに刺激をもらいました。行動力あふれる中国からの留学生トントンフェイさん、音楽専攻で歌うこと好きな山崎さんのお二人は、ぜひ福井ラウンドテーブルに行きたい、とおっしゃっていましたので、再会できることを楽しみにしています。こうやって人とのつながりがたくさんできていくことは楽しいと感じます。福井県とは違った土地、福井大学とは違った大学での経験は、これまでとは別の新しい思考フレームを与えてくれる貴重な経験だと言えます。異質な他者と多く触れ合うことで、自らの常識を疑ってみたり、知らなかった世界を知ったりするそんな経験を多く積めることも、教職大学院で勉強してよかった、と思えることの一つです。

#### 福井大学教職大学院教職専門性開発コース2年 河邊里紗子

さだまさしの歌声が駅のホームに響き渡っていた。電車に揺られること約7時間。私は修学旅行以来、人生で2度目の長崎県を訪れていた。長崎は異国情緒溢れ、街の人たちもあたたかく、私が住んでみたいと思っていた街の1つでもあった。

ラウンド1日目は、ポスターセッションとシンポジウムが行われた。そして夜の懇親会では、長崎大学の教職大学院生と美味しいご飯をいただきながら、お互いの院生生活について交流した。他の教職大学院の院生と話すのは初めてで、同じ“教職大学院”と言っても、取り組み方やインターン日数を始めとした多くの違いがあり、改めて福井の教職大学院の仕組みや私たちのインターン環境は整った、恵まれたものだと感じた。そして懇親会の後には、福井からラウンドに参加した院生・大学の教員・リーダーの先生方で中華街に行き、本場の長崎ちゃんぽんと中華料理に舌鼓をうった。素敵な時間を過ごせたことは言うまでもない。

2日目は、実践報告会が行われた。長崎では初めてのラウンドテーブルだったらしいのだが、話しているときの和やかなあたたかい聴き手の方々の空気、活気に溢れ熱い思いが飛び交う話し合いは、全く福井のラウンドと



変わらないように感じた。私のテーブルは報告者として私の他に長崎大学附属幼稚園の原田園長先生、聴

き手として長崎大学のガンガ教授，長崎大学付属特別支援学校の末次教諭，長崎大学教職大学院の院生の南先生，舛元さん，ファシリテーターとして九州大学の田上教授というメンバーだった。県外の方たちばかりということあり，教職大の仕組みやインターン先の学校の説明なども詳しく話した上での報告となった。内容がうまくまとまらないことが私の課題となったが，報告後に「きっといい先生になるよ」とあたたかいお言葉をかけて頂き，とても嬉しくなった。原田先生の報告では，小学校以降の学びを見通した幼稚園教育の実践について語られた。園児がケンカになった際に，職員の先生方はすぐに仲裁に入ってしまうのではなく，様子を観察したり，自分たちで解決出来るように促したりするという話はとても印象的で，教師の「待つ」力というのは，子どもの学びを支える要素の大きな1つではないかと感じた。また，中学校にインターンに行く中で，小中連携・中高連携の大切さを感じてきた。しかし，子どもたちの成長や学びというものは自分の校種とその前後の繋がりの中のものだけではなく，幼稚園（幼児期）から大学まで（もしくはそれ以降も）ずっと続いているものであり，教師は長期的な視野を持って子どもたちの学びを支えていかなければいけないととても強く感じた。

長崎の3日間は本当にあっという間に終わってしまった。学びや気づきが多く，とても充実した3日間となった。

## 2 第14回スクールリーダー・フォーラム @ 大阪教育大学

### (1) 概要

大阪教育大学と福井大学との研究交流の歴史を若干紹介したい。最初は2011年6月25日の福井大学ラウンドテーブル1日目で大阪教育大学の木原俊行氏が報告、「ニュースレター」第33号(2011.06.25)に大阪教育大学の大脇康弘氏が寄稿、同年9月17日の日本教師教育学会第21回大会(福井大学)のシンポジウムで大脇康弘氏が報告され、大会には大阪教育大学夜間大学院生6名が参加された。同年11月23日の大阪教育大学第11回スクールリーダー・フォーラムには私も含めて福井大学から4名が参加した。以上の2011年度が大阪教育大学と福井大学との研究交流が始まった年といえる。その後、2012年度、2013年度、2014年度と毎年11月のスクールリーダー・フォーラムには福井大学から教員と現職院生が参加し報告も行っている(2012年度は12名、2013年度は11名、2014年度は8名)。大阪教育大学夜間大学院の大脇研究室の院生は管理職(校長・教頭)がほとんどであるが、福井大学のラウンドテーブルや夏の集中講座にも参加されたことがあり、交流が進んでいる。以上のように2011年度から4年間、お互いに学び合う関係性を構築してきている。大阪教育大学のラウンドテーブルも少人数の「語りと傾聴」を大事にするやり方であるが、これについては福井でのラウンド方式からも多くを学んでいると思われる。福井のメンバーは大阪教育大学で発行している冊子や研究紀要に寄稿しており、同時に『月刊高校教育』(学事出版)の連載企画にも執筆している。

11月22日(土)大阪教育大学(天王寺キャンパス)で開催された第14回スクールリーダー・フォーラムに私(森透)は個人的には4回目の参加になると思うが、今回はスタッフ4名(森透・木村優・半原芳子・藤井佑介)とスクールリーダー養成コース院生4名(野尻友佳子・谷康博・石崎隆幸・金子奨)の合計8名で参加した。報告者はスクールリーダー養成コース院生4名と今回はスタッフの半原先生も報告者を勤めていただいた。藤井先生には記録者を、そして木村先生と私はファシリテーターという役割であった。今回のニュースレター報告については、私が全体的な概要を紹介し個別の感想は参加された方々にお任せしたい。今回の参加者は32報告で100名弱ということであった。また冊子『第14回スクールリーダー・フォーラム ミドルリーダーの実践と育成支援—大学・学校・教育委員会のコラボレーション—』(全137頁)を当日配布された。毎年、報告者の資料等が集録されている冊子を発行することは大変な労力だと推察される。深く敬意を表したい。

今回のフォーラムのテーマは「ミドルリーダーの実践と育成支援—大学・学校・教育委員会のコラボレーション—」であり、形態は「ラウンドテーブル型(語りと傾聴による学び合い)」と提示されていた。10時30分開始で、午前中は全体会、午後は小グループでのラウンドテーブル3時間であった。3時間の内訳は報告者2名で1人70分の持ち時間。自己紹介20分・報告A70分・休憩10分・報告B70分・まとめ10分)。全体会は儀式的な側面もあると思われるが、もう少し参加者と対話的な環境をつくれなにかという印象を持った。会場が階段式の固定椅子なので難しいとは思いますが、報告者の話を一方的に拝聴するというあり方はアクティブ・ラーニングを目指しているフォーラムとしては再検討を要するのではないかと思う。司会者のファシリテートによって会場を和らげ、座席の隣近所で話してもらい質問や意見を求めるということも可能かもしれない。福井では報告のあとは原則的に必ずカンファレンスとい

うものをセットにして報告を振り返り自らの実践との関係性を意味づけるという場を設けるようにしている。ともあれ今回の3名の方の報告—①基調講演・油布佐和子早稲田大学教授「教師の成長とその条件」、②宮岡愛子大阪市立玉出小学校副校長「次世代の教育の構築を目指して」、③寺野雅之大阪府立茨田高校校長「教員の力を引き出す」—は、いずれも興味深く聴かせていただいた。基調講演の油布先生のご講演では、ご自身の実践に引き寄せて、具体的に早稲田大学の教職大学院でどのようなことをされているのかをお聴きしたかったと思う。3名のお話しはどれも貴重で問題提起的な内容であったので参加者とシェアできる場があればさらによかったと思った。報告のあとのピアノとチェロの共演はいつも感銘を持って聴かせていただいている。音楽というのは心に染み入るもので、このフォーラムに音楽をご専門にされている方々のご協力があることが大事だと改めて感じたしだいである。

午後のラウンドは全部で16グループ、1グループの人数は基本5名であった。2名の報告者と司会者・書記・参加者1名の合計5名で、グループによって参加者2名の場合も若干あったが基本的には小グループでの深い語りと傾聴を可能とする場の設定であった。私のグループの報告者は小田恵美子先生（豊野町教育委員会指導主事）と吉田実先生（大阪府立とりかい高等支援学校）であったが、内容は省略するが、非常に熱くかつ内容の深い実践報告であった。タイトルは小田先生が「教頭としての学校組織改革—職員室の担任としての次世代リーダーの育成—」、吉田先生が「高等支援学校の生徒指導・生徒支援と学校づくり—とりかい高等支援学校開校の取組み—」。福井でのラウンドで味わう感動と喜びの体験を今回も持つことが出来たことを大阪の皆様にも深く感謝したい。また、フォーラム終了後は天王寺駅近くの有名なお店の中華店で交流会を持つことが出来たことにも感謝したい。

（森透）

## （2） 参会者の声

### 埼玉県立新座高校教諭 金子奨

11月22日、大阪教育大学で開かれた「第14回スクールリーダー・フォーラム」に参加させていただいた。開会あいさつから、油布佐和子氏の基調講演、大阪の学校現場からの発信、ピアノとチェロの共演、ラウンドテーブル、武井敦史氏の総括講演までの起伏に富むプログラムのあいだじゅう、かすかにしかしずっと鳴り響いていたものは何だろうか？ 長野県北部地震で緊急停車した「のぞみ」の薄暗がりのなかで、ぼくはそれこそ暗中模索を繰り返していた。

けっきょくそれは、教育といういとなみの孕む「アポリア」ではないのか？

大阪という地域の教育現場と教育行政、批判的リテラシーとPISAリテラシー、学校の生徒志向と目標達成志向、教師の適応的熟達と定型的熟達、動機の内発性と外発性、リフレクションとマネジメント、生徒の活動経験と教科の系統性、学びと教え、子どもの現実と社会的な要請、ローカリズムとグローバリズム、いまこことあそこ、内と外...教育にかかわる現場を悩ませるいっけん二項対立的な構図が、天王寺キャンパスを浸潤していたのではないか。つまり、内に自足しようとする運動とそれを外へと誘い出そうとする動きの対立が、教育という活動を浸し、ミレニアムホールに集うひとびとをそれぞれの立ち位置や信念、志向にそって布置させ、あそこでさざ波をたて、ここでうねりを起こし、そちらで渦巻きを生じさせていたのではなかったか。

ところで、精神分析医の中井久夫は「自己意識」を次のように定義している。

自己意識というものは、安定した円環からのある種の逸脱であって、円環に回帰しようとする傾向性と円環より出立しようとする傾向性とが抗争して奇妙な力動的状況を構成しているところに生じる不安定な結節点のごときもの、ひとつの逆説的事態（である）

ひとの自己意識がこのような逆説的事態であるとするならば、人間がつくりだすすべてのものごとに「奇妙な力動的状況」が浸透している可能性がある。とくに、「いまここ」を生きる子どもと「あすあそこ」をめざすおとなが出会う教育という場では、この奇妙な言わば「脱自的統合」は顕在化しやすいのだろう。

かつてP・フレイレは「文字を読み書きすることは、世界をより批判的に再読すること」であり、「世界を書きなおす」ための「旅立ち」なのだと主張した。そして、教育者が自らの「いまここ」を知悉するとともに、だからこそなおさら教師の「いまここ」からではなく、被教育者の「いまここ」から出発して、「彼方」にいたることの重要性を強調してやまなかった。しかしだからといって彼が「円環に回帰しようとする傾向性」を帯びていたわけではないだろう。逆である。フレイレは円環構造からの「旅立ち」をめざし、それゆえに「希望」を語ることができたのだ。何ゆえに？

それは彼が対話というデモクラティックな関係に依拠していたからである。異なるひが出あい、対話することによって、たがいに越境、媒介しあう、そのプロセスに円環構造から逸脱するベクトルが生じるのだ。つまり、中井のいう「奇妙な力動的状況」や「不安定な結節点」は、孤独な営為においてではなく、他者との接触において生みだされる。いや、他者という外部との接点に外への通路がひらけると同時に、内部の円環構造がかえって活性化するといったほうがいいのかもしれない。わたしがわたしでありながら、わたしならざるものへの変様が、わたしたちにおいて生起するのだ。

そのようにして見慣れた世界がひび割れ、安定した構造からの逸脱が出来る場を、現場と呼ぼう。そうした場を生成させるのは、教師である。子どもが子どもらしくいられることを保障し、なおかつ逆説的に、子どもを彼方へと出立させるのは、境界線をまたいでいまここ／あすあそこを媒介する教師の存在である。

だから、教育にたずさわる者は、一義的ではありえない。それは、ホールで演奏されたショパンの作品65番のチェロとピアノの演奏が切り離せないのと同じだ。ふたつの楽器の奏でる音は、競いあいながらもひとつの曲を織りなしていくが、演奏者を協奏させているのは、ふたりの〈あいだ〉に生成している間主観的な主体性というほかないものだ。

冒頭、教育の「アポリア」と書いたが、じつはそれは教師が、内／外の境界線上にまたがる以上、両者に引き裂かれざるをえないという意味での「難題」なのである。しかし、その二項対立的な構図は、教師が子どもたちとともに生成させる間主観的な存在様式／現場のさなかに、ひょっとしてそのつど止揚されているものなのかもしれない。

あわら市芦原中学校教諭 石崎隆幸

去る11月22日（土）大阪教育大学にて行われた「スクールリーダー・フォーラム」に参加、ラウンドテーブルでの報告の機会をいただいた。

「石崎先生、お願いできますか。」と森先生からお誘いを受け、「合同カンファレンスのように、気楽にお話しすればよいだろう。」と簡単に考えていた私は、当日、ラウンドテーブル会場で冷や汗をかくことになる。受付でいただいた名簿から同じグループの方の名前はわかる。報告を要約した原稿を事前に提出し、製本され手元にあるので報告の内容もわかる。ところがである。同席の方の要約が載っていない。「どのような報告をされるのだろうか。」と不安になる。そして、ラウンドテーブルが始まり、さらに不安になる。私のグループ、司会は深野先生（帝塚山学院大学教授）、書記は酒井先生（大阪府教育センター指導主事）、もう一人の報告者は水野先生（大阪教育大学教授）、参加者として餅木先生（大泉学園校長）。この場に私はふさわしくないのではないかと。校長先生や大学教授、指導主事の先生方に私の報告はどう受け入れられるだろうか。取組としてあたりまえのことしかしていなくて、「こんなこと、どこでも取り組んでいる。」と言われまいだろうか。とてもとても不安になる。

自己紹介の場面で深野先生から『しんどかったけど良かったこと』をお話しながら自己紹介をしていきましよう。』とお話があった。私は「この席に座っていることがしんどいです。でも、発表したあとに『聞いてもらってよかった』、『聞くことができてよかった』』と聞いていただけのようにがんばります。よろしくお願ひします。」とお話しするだけが精一杯だった。

水野先生からは『学校が本当の意味で連携するには何が必要か？』と題し、カウンセラーとしての立場からの実践報告をされた。「被援助志向性（援助されたいと思っている度合い）」について研究されているそうだ。日頃の学校訪問から学校の考え方との「ずれ」を感じていること、教師の「助けられ下手」には

自身の幼少期体験に要因があるのではないかという考え、チーム援助による学校との連携をいかに提案していくかご尽力されていることなどが報告された。

私は勤務校での取組、研究主任として心がけていることについて報告させていただいた。指導主事訪問という制度に先生方は特に興味を示され、その機会を中心とした学校全体での取組にも関心を示してくださいました。私の話をうなずきながら聞いてくださった。その姿に安心し裏話まで飛び出し、40分間の発表があったという間に終わった。水野先生から「先生方が（やらされ感をもたないで）楽しく取り組まれていることが一番いいです。」とご高評をいただいた。さらに、福井の教育についても興味を示され、幅広く先生方から質問された。「福井県から参加している先生」としても見ていただいているのだと感じた。また、その発言に責任感も感じた。

午前中の基調講演では「80%達成できたということは、残りの20%には効果がなかったということ。そこにも問題点があるのではないのでしょうか。」と油布先生からのお話を聞き、私の研究の甘さを指摘されたようで萎縮してしまった。その後、玉出小学校副校長先生自らが学校改革に取り組んだ実践報告、茨田高校校長先生からの実践報告。午後はラウンドテーブルでの発表。締めくくりの総括講演。さらに、フォーラム終了後は場所を移動し、あべのハルカス12階での懇親会。盛りだくさんの一日で、朝4時起きの方は帰りのJRではうつろであった。が、その帰りのJR車内では反省会。木村先生からは森先生へ間髪入れずのスピーチ依頼。藤井先生からは細やかなお心遣い。聴いていた（「聞いていた」とは違うのです）私。知らず知らずのうちに疲れが吹き飛ばされていた。一日の締めくくり、ラウンドテーブルのキーワードの一つ「傾聴」が車内でも実践できたと自画自賛。この日感じたことや考えたことを長期実践研究報告や今後の生活で生かしていかなければ...。貴重な経験をさせていただいた森先生に申し訳ない。

#### 福井大学教職大学院特命助教 半原芳子

大阪教育大学で開催された「第14回スクールリーダー・フォーラム」には今回ラウンドテーブルの報告者として参加させていただきました。前半のフォーラムの様子は森先生のご報告に詳しいので、ここでは後半のラウンドテーブルのことを報告したいと思います。

私のグループは5名のメンバーで、司会は大阪市教育委員会の方、報告は大阪教育大学の院生であり茨木市内の中学校に勤めておられる真島克宣先生と私、そして聴き手は東京学芸大学の先生と大阪で特別支援教育に携わっていらっしゃる先生でした。真島先生は、勤務校の特性と現状をよく把握された上で校内研修を積極的に進めておられ、研究推進委員会の立ち上げ・小中連携による授業研究会・夏の小中合同研修会・校内授業研究会などを手がけていらっしゃいます。報告ではそれらの具体的な内容をじっくりうかがうとともに、真島先生が異動されても校内研修がより良く持続・発展していくためにはどうしたらよいか議論になりました。具体的な方向性は見出せませんでしたが、教育委員会の方をはじめ多様な領域のメンバーによって多角的に模索できたことで机上の空論に終わらない実質的な話し合いになったと思います。私は外国人児童生徒への学習支援の実践を報告しました。最近ではファシリテーターをすることが多いため久しぶりに報告者としてたっぷり語りました。みなさんとても丁寧に共感して聴いてくださり、絡まっていた自分の実践の糸がほどけていく感じがしました。余談ですが、この数日後に行われた福井大学教職大学院メンバーでのFDで再度報告の機会をいただいたのですが、その時大阪教育大学でのラウンドテーブルでほどけた実践の糸を今度は編み直していく手がかりを得ることができました。FDで報告している際大阪で出会った同じグループの皆さんの顔を一人一人思い出していました。

ラウンドテーブルでテーブルを囲む方達との出会いは偶然であり必然だと毎回思います。今回も素敵な出会いに恵まれました。ありがとうございました。

### 3 教師と学校を支える学びあうコミュニティを培う @ 静岡大学

#### (1) 概要

##### 企画の趣旨

本学では、2014年1月に初めてラウンドテーブルを実施した。今回は2回目のラウンドテーブルであった。ラウンドテーブル実施の発端は、教育学部の教員養成改革にある。改革の基本的方向性は「静岡県内の教育関連諸機関及び国内外の教員養成系大学と連携し、‘Act Globally, Nationally & Locally’の観点から教員養成の高度化を行う」である。梅澤収教育学部長によれば、「福井大学実践ラウンドに学びながらも、現職教員を対象とした『学校マネジメント力育成』を組み込んだ内容とし、ナショナルな連携・協働において静岡の特徴を出すこと」を意図していた。しかし、1回目のラウンドテーブルの企画を引き受けたメンバーで話し合う中で、「参加者が限定されるのでは」との懸念があがった。そこで、教員をはじめとした学校教育関係者に、対象を広げて実施した。

今回のラウンドテーブルでも以上の点は継承しつつ、以下4つの特徴を持たせた。

#### ①テーマを「教師と学校を支える学びあうコミュニティを培う」とした。

今回の企画を進めていた時期に、OECDの国際教員指導環境調査(2013)の結果が公表された。日本の中学校教員は指導への自信はもっとも低く、勤務時間は最も長いことが明らかになった。そこで、教員だけではなく異なる領域の人もいる小グループで、教員が実践を語って聴いてもらうことを通してみずからその価値を確認する機会や、異なる領域の人に教員の仕事の意義や大変さを知ってもらう機会を作りたいと考えた。さらに、語りの中から見出された問いについて学びあうことで、「学び続ける教員」として歩み続ける場を設けることを意図した。

学校マネジメント力の育成に関しては、コミュニティ・スクールなど、地域住民との協働による学校経営が求められている。教員や教育委員会の指導主事らが、地域住民と出会いながら、学校マネジメント力の育成について考える機会を提供することにした。

#### ②教職員、学校管理職、指導主事以外の人びとも参加を呼びかけた。

前回は教職員、学校管理職、指導主事などを、主たる対象として実施した。しかし、今回は①に記したように、領域や立場を超えた出会いを創出するために、公民館職員、地域活動実践者、ボランティアコーディネーター、PTA役員、学校支援地域本部コーディネーターなどにも、参加を呼びかけることにした。

#### ③終日のプログラムとし、ミニ講演を組み入れた。

前回は半日のプログラムで実施したため、休憩時間が取れず、参加しての感想をグループや全体で共有する時間が取れなかった。参加者からは、報告後の質問や感想の時間が十分ではなかったとの声があがった。以上を改善するために、今回は終日のプログラム(表参照)とした。ミニ講演は、ラウンドテーブルでの学びに関連したテーマを設定した。

④前回のラウンドテーブル参加者に、前回とは別の役割を依頼して参加してもらった。

前は聞き手として参加された方に報告者を、報告者として参加された方にファシリテーターを、ファシリテーターとして参加された方に報告者をお願いすることを進めた。前回とは異なる役割を務めていただく中で、本学のラウンドテーブルを支える人びとの拡大につながることを期待した。

表 「実践研究ラウンドテーブル in 静岡 2014」プログラム

時間	内容
9:20-9:40	ファシリテーターと報告者の打ち合わせ
10:00-10:20	はじめに ①高度化センター長挨拶 ②全体に向けてのガイダンス
10:20-11:00	ミニ講演①「今求められるおとなの共同の学び——子どもたちの豊かな学びを創りだすために」村田晶子（早稲田大学）
11:00-11:10	休憩
11:10-12:30	ラウンドテーブル報告Ⅰ ①自己紹介【10分】 ②報告【40分】 ③質問・感想，意見交換【30分】
12:30-13:30	昼食
13:30-14:10	ミニ講演②「市民参加による学校づくりの意義と可能性」仲田康一（常葉大学）
14:10-15:20	ラウンドテーブル報告Ⅱ ①報告【40分】 ②質問・感想，意見交換【30分】
15:20-15:35	感想の記入，休憩
15:35-16:00	クロージングセッション (まとめ)

## 実施報告

参加者は 89 名で、グループ数は 14 となった。参加者の内訳を簡単にまとめておく。

### ①県外／県内別

- ・ 県外 19 名
- ・ 県内 70 名

## ②属性別

- ・ 大学関係者（研究者，実務家教員など）33名（うち，静岡大学教員15名，福井大学教員6名）
- ・ 教員（現職院生含む）27名（うち，静岡大学教職大学院生12名，静岡大学教職大学院修了生7名，福井大学教職大学院生1名）
- ・ 行政職・指導主事12名（静岡大学教職大学院修了生3名）
- ・ 学校管理職5名
- ・ 社会教育関係者5名
- ・ 学部生4名（4年生3名，3年生1名）
- ・ 大学院生1名
- ・ その他2名

## ③役割別

- ・ ファシリテーター14名（うち，静岡大学教職大学院修了生1名，静岡大学教員5名，福井大学教員2名）
- ・ 報告者30名（うち，2人1組での報告が2組，静岡大学教職大学院生6名，静岡大学教員4名，福井大学教職大学院生1名）
- ・ 聴き手44名
- ・ 全体進行1名

実施中と実施後の参加者の反応は，おおむね良いものであった。ミニ講演とラウンドテーブルという構成については，多くの参加者より肯定的な評価をいただいた。ラウンドテーブルについては，教員の参加者が多い中，学校教育関係以外の報告者が実践を語ったとき，学びあいが成立するのかという懸念があった。しかし，新しい出会いに刺激を受けている様子や，語りを真剣に聴き自分に引きつけて実践をとらえ返す様子や，共通するテーマについて議論する様子などが，各テーブルでうかがえた。学校教育関係者に加え，異なる領域の人が参加し，満足して帰って行かれたという点では，手ごたえがあった。他方で，大学と教育委員会の連携による，学校マネジメント力の育成の点から見ると，この条件にあてはまる方の参加が少なかった。

付記：本文は，渋江かさね・島田桂吾・中村美智太郎・三ッ谷三善「教員養成の高度化に向けた取り組み——『実践研究ラウンドテーブル in 静岡 2014』をふり返って——」『静岡大学教育実践総合センター紀要』No.23，169-171頁を基に，加筆修正したものである。

(渋江かさね)

## 実践研究ラウンドテーブル in 静岡は何をめざすのか ～そのねらい及び成果と課題～

静岡大学の“実践研究ラウンドテーブル in 静岡”（以下、静岡実践ラウンド）は、福井大学共催、静岡県・静岡市・浜松市後援を得て、第1回（2014.1.25）、第2回（2014.11.23）と実施されてきた。ここで改めてそのねらい、及び成果と課題をまとめておきたい。

初発の契機は、2012年度の文部科学省の公募プログラム「大学間連携共同教育推進事業」に教員養成版（バージョン）として福井大学が採択され、静岡大学がこの「ナショナルな連携・協働組織」（後に、福井大学“教師教育改革コラボレーション”となる）に参加したことである。当時の静岡大学は、教員養成改革の基本的方向性を、「静岡県内の教育関連諸機関及び国内外の教員養成系大学と連携し、‘Act Globally, Nationally & Locally’の観点から教員養成の高度化を行う」と確定しつつあり、ナショナルな連携・協働の具体的な在り方としてその参加は意義あるものと判断した。

そして、2013年度に入り、ナショナルな「教師教育改革の連携・協働」の一環として、静岡で福井大学の実践研究ラウンドテーブルのようなものが開催できないかという打診があり、学内関係者と協議し引き受けることにした。その基本コンセプトは、福井大学実践ラウンドに学びながらも、現職教員を対象とした「学校マネジメント力育成」を組み込んだ内容とし、ナショナルな連携・協働において静岡の特徴を出すことであった。

学校マネジメント力育成の視点を重視する理由は、「養成＝大学、採用・研修＝教委という棲み分け論を脱して、養成・研修統合型システムの構築へと改革をすすめる」ためには、大学が組織的対応をしてこなかった研修段階を組み入れた取組みを組織的かつ意識的に行う必要性があるからである。具体的には、①教育委員会や県内の教職課程を置く大学と連携・協働して、大学が組織として教員研修の設計・デザインに参加協力するとともに、その研修成果に対する適切な評価方法（単位の内容・方法・評価基準等）を開発して大学・大学院のカリキュラム化・単位化を行うこと、②教育委員会と連携・協働して、教師の職能成長を支援するための教育プログラムのモデル開発を大学が実施すること、である。

このような研修／教育プログラムが構築されることによって、「学び続ける教員像」を実質化していくことができると考えている。これは、教員養成大学学部の組織改革論として極めて重要な視点であり、静岡大学が、教育学研究科附属「教員養成・研修高度化推進センター」を2014年度に設置した根拠でもある。静岡実践ラウンドは、このような構想の中に位置づけられている。

### 第1回のねらいと構成、成果と課題

第1回のねらいと構成は、上記の経緯と趣旨をふまえつつも、県内の教育関連諸機関と連携し教員養成・研修を考え実践する第一歩として、「腹を割って意見交換ができる場」を創ることにした。より多くの学校教育関係者に参加してもらいたいとの思いで、「教師の力量アップを支える学校～実践研究ラウンドテーブル in 静岡」と題して、2つの小テーマ（「A. 教師の成長」と「B. 学校のマネジメント」）を設けて午前中に行われた。参加対象として念頭においていたのは、県内や県外の教諭、管理職、指導主事と大学教員であった。なお、「教師の成長を（Wo : rld)に聴き合う」をキャッチフレーズとした。午後は、別の採択プログラムによるシンポジウム「成長し続ける教師と静岡の教育～新時代を担う学校と教育行政のあり方を考える～」を行った。そのキャッチフレーズは、「静岡の教育を（Wo : rld)に語

る」である。

第1回の成果と課題についてである(以下は、世話人渋江かさね准教授の報告書(2014.3.31)による。)第1に、予想外の参加者があった。参加者は、総計121名、静岡県内96名、静岡県外25名であった。内訳は、静岡県内96名(うち静大教員12名、静大教職大学院生11名、静大教職大学院生修了生15名)、静岡県外25名(うち福井大学関係者7名)であった。

第2に、静岡大学教育学部と、福井大学ほか県外の教員養成系大学(和歌山大学、宮崎大学、北海道大学など)との間に、「ナショナルな連携」の基盤を構築することができた。

第3に、サブテーマ「教師の成長」は、幅広い世代の教師の参加を願い設けた。実際に、若手から熟練までの教師の参加があった。教師は多忙なため、自分自身の歩みをふり返って確認する機会、熟練の知恵を若手が継承する機会、若手の歩みに熟練が学ぶ機会といったものを、なかなか持てない。その意味で貴重な機会を提供できた。

第4に、サブテーマ「学校のマネジメント」について6つの小グループ(教職大学院が力を入れたい領域)を編成したが、県総合教育センター指導主事や大学教員に加え、校長、教育長、事務職員、元社会教育委員、教職大学院生など、多彩な教育関係者が集まった。いずれのグループでも、報告者の取り組みを傾聴した上での、忌憚のない意見交換ができたとの報告があった。

第1回の課題としては、(1)県外からの参加者の確保のために時期や広報を工夫する必要がある、(2)半日でラウンドテーブルを実施したために時間的なゆとりがなかった、(3)1グループあたりの人数を7~8名から6名程度とする必要性、(4)静岡大学教職大学院生の参加の工夫(時期やカリキュラムへの位置づけ等)、その他である。

## 第2回のねらいと構成、成果と課題

第2回のラウンドテーブルは、上記の成果と課題をふまえつつも、基本コンセプトに関わる論点として、「子どもの育ちに関わるおとな—公民館職員、地域活動実践者、ボランティアコーディネーター、PTA役員、学校支援地域本部コーディネーターなど」や「教育学部で教員や社会教育の仕事につくことを志す学部生」も参加してほしいということである。

渋江(静岡大学イノベーション社会連携推進機構「ニューズレター第30号 地域と大学」2015.3)によれば、「教育委員会、学校、大学という関係者のみで教員養成と研修のあり方を考えあうのではなく、もう少し広い視野で一領域は違っても子どもの育ちに関わっている・将来関わりたいという共通性の中で—考えあう」ことである。

企画書(2014.6.30)によれば、「教師と学校を支える、学びあうコミュニティを培う」と題して、前回到続き「A. 教師の成長」と「B. 学校のマネジメント」の2テーマで行うが、次の内容で行うこととした。

1. 11月下旬に1日のラウンドテーブルとし、午前と午後にかけてじっくり語り、聴き合う構成とする。また、午前と午後それぞれ語り合い聴き合うために参考となるミニ講演を置いた。
2. 「A. 教師の成長」に関しては、教員がみずからのあゆみや実践について、小グループで時間を

かけて語り聴いてもらうことで、自己のあゆみや実践の価値を確認する機会を提供すること。その際に、教員だけではなく、教育に関心をもつ異分野の人びとを含んで、異質なもののからの視点を入れて学びあう機会としたい。

3. 「B. 学校のマネジメント」に関しては、小中一貫教育や、コミュニティ・スクールなど、(学校) マネジメント力が問われる政策が推進される中で、組織マネジメントに関わる現場の実践や、教員の組織マネジメント力を養成するために大学と県教育委員会が協働して取り組んできた実践交流をする。グループは、教員だけではなく、教育に関心をもつ異分野の人びとを含んで構成し、「学校のマネジメント」に関する展望を切り開く機会を提供したい。

第2回報告(2014.11.28)によれば、成果は次の通りである。

第1に、参加者89名で、県外からの参加者は19名であった。参加者の属性は、最も多いのは教員(現職院生含む)であり、そのほか指導主事、学校管理職、事務職員、大学教員(教育学系、看護系)、静岡市教育長、元静岡市教育委員長、学校支援地域本部コーディネーター、公民館職員、地域活動実践者、PTA役員、ボランティア協会職員、女性学習財団職員等の参加があった。共催の福井大学教職大学院からは7名が参加した。学内の参加者については、静岡大学教職大学院生12名(1年生9名、2年生3名。うち5名は報告者)、静岡大学教職大学院修了生10名(総合教育センター指導主事2名、地教委指導主事1名、小学校教員3名、中学校教員3名、特別支援学校教員1名。うち5名は報告者。1名はファシリテーター)、静岡大学教育学部および教職大学院教員15名、静岡大学教育学部生4名(3年生1名、4年生3名)であった。

第2に、参加者からはおおむね好評価を得た。ラウンドテーブルの構成がよかった、異なる校種・職種の人との交流により連携の必要性を自覚した、ほかの人の視点から自分の実践を省察し今後を考える機会となった、など。

第3に、静岡県下の教員の資質向上の機会、大学と教育委員会が互いの実践を交流しながらともに教員の資質向上を考える機会、子どもにかかわる教員と他職種等の交流機会、教職大学院修了生と教育学部卒業生の資質向上の機会として、ラウンドテーブルを一層発展させていくことの必要性を、主催者側として自覚する機会となった。

課題としては、第1に、教育委員会及び静岡県外の参加者等を増やしていくことがあげられる。

### 実践ラウンドの在り方をみんなで考えていこう

ところで、第2回静岡実践ラウンドに参加された福井大学教職大学院のみなさんの感想と省察が、福井大学教職大学院編集・発行『教職大学院 Newsletter No.68』に寄せられている。その中では、静岡のラウンドの取り組みに参加して、あらためて自身の経験、福井で取り組みの中で自明なこととしていたことの意味が照らし返されたことが、参加者の省察として記されている。会の始め方、趣旨や方法の説明や、グループの設定にも、それぞれの取り組みの状況をふまえた選択と意図がある。自他のアプローチを照らし合わせることによって、それぞれの状況と意図が照らし出され、その意味が問い返されることになる。そうした省察に触れ、静岡実践ラウンドの企画組織にあたったメンバーの間でも、改めて、静

岡ラウンドでの取り組みの意味について様々な議論が行われた。

導入の仕方についても、今回の静岡ラウンドでは、多様な領域や立場の人びとがそこに参加する実践ラウンドであるため、「実践を語り聴きあって学びあう」を成り立たせるための「趣旨や方法」、とりわけ「聴きあう」を成り立たせるための「注意」のような事柄—それらには「こういう学び方をつくっていきたいですね」という思いを込めた—を伝える必要があると判断してそうしたやり方を選んできている。

おそらく論点は、「ラウンドテーブルはどうあるべきか。そして、参加される方々に対して、どのような力を付けてもらう場であるべきなのか。またそのためにどのような内容構成や方法を行うべきなのか」ということであり、現在でも意見交換をしているところである。

なお、この点に関連して、静岡大学の教職大学院のカリキュラムは、福井大学教職大学院とは異なり、「学校拠点方式のような形で実践と省察を繰り返す中で学んでいくこと」を主軸としておらず、また、ラウンドテーブルも現状では教職大学院のカリキュラムとは切り離されていることを指摘しておきたい。一方、これらは、今後の検討すべき改善課題であることも認識している。

以上、2012年度から福井大学「教師教育改革コラボレーション」に加わったことを契機に始まった静岡実践ラウンドであるが、静岡大学は、教員養成・研修統合型の教師教育システムの構築（日本型教師教育システムの再構築）という大きな構想を念頭におきながら、時々の具体的な成果と課題を検証しながら、試行錯誤しつつ企画と実施を行っている。

これまで福井大学や宇都宮大学、また大阪教育大学等においても多様な実践ラウンドが行われているが、それらに学びながら、今後も「実践を語り聴きあって学びあう」ことの意味や価値、そしてそのデザイン・方法についてみなさんと意見交換しながら取り組んでいきたいと考えている。

（梅澤 収）

## （2） 参会者の声

今回のラウンドテーブルでは、「ふり返しシート」を書く時間を設けた。目的は、ラウンドテーブルで学んだことを各自でふり返って整理、確認していただくことにあった。

以下で紹介する「参会者の声」は、ふり返しシートに記載された内容の一部である（「報告書等への掲載を希望しない」との意志が示されなかったものを掲載している。また、紙面の都合で一部のみの掲載とした）。

- ・ 自分の教職を振り返る中で、今後自分が目指す教師像を考えることや、教職大学院で学ぶべきことをつかめた気がします。自分の報告に対し、5人の碩学が示唆をくださいました。とても晴ればれとした思いです。
- ・ グループ編成を多様にいただき、さまざまな視点から議論で来てとても有意義だった。実際の課題から立ち上がって挑戦する姿は素晴らしいと思い感動した。資料を読むだけでなく、直接話ができ理解が深まった。ミニ講演が実践研究とつながっていく内容でよかったのではないかと。実践者の方の発表があってもよいのではないかと考えた。
- ・ 普段聞くことのできない他県での取り組みの様子や大学の先生が大学外で取り組まれている学校との協調の様子は大変興味深いものであった。実践を聞くことは、自身のこれまで、これからの取り組みとの共通性を見つけるとともに、これからの自分の課題意識を広げる手がかりとなった。理論だけではない実践の中にある学びを見つけることもできた。ラウンドテーブル前の講演会はラウンドテーブルでの自分の学びを手助けしてくれるものだった。

- ・ 教員として，“学び続ける社会人”であること，“学びの専門家”であることの重要性を実感しました。女性のキャリアについて考える機会の多いグループでしたが、様々な人材を活用し、受講者のみならず、講師・企画者も学びを広げていくことの大切さ、個人が性差など何を生きにくさを感じているかを、対話等を通じて感じ取れる感受性をもつこと、それに対応する組織力をもつことの大切さを学びました。とても、考え方を広げてくださる貴重な場でした。
- ・ 多業種の方々とお話しする機会は本当に大切だと思います。日々仕事をしていると自分の分野だけの交流となりがちですが、一方で、お隣の分野は気にかけていて、交流をしたいなどは、思っていました。そこで、今回のコミュニティ・スクールの現状をみて、社会教育主事としての感じるものがあり、今後の仕事に活かしていきたいと思います。
- ・ ラウンドテーブルで報告していただいたお話をその後の話し合いの様子を通して、こうした取組の重要性を改めて感じます。地域で活動されている方からは、親の様子やそこで大切にしていることなどが話され、また、学校の異なるところをつなげていく課題をもつようになったという発言が交わされました。そして、それらの地域や学校の学びを支える生涯学習事業、施策がその実態に向き合いつつ、展開されていくべきだと方向性も確かめられたと思います。おとなの学びを共同で展開する体験の機会でもあるこのラウンドテーブルをつみ重ねていく必要があると思いました。
- ・ とっても楽しかった。大学での教員養成について、私の漠然とえがいていたものを、はるかにこえる実践をお聞きしてうれしかった。大人みんなで子どもを育てることの大事さを改めて思いましたし、何より大人が真の大人になることの重要性を思いました。こんなにすてきな会に報告者として呼んでいただいたことに深く御礼を申し上げます。生涯勉強の本当の意味がわかったように思います。また、楽しいことだとつくづく思いました。
- ・ 緊張しながらの初参加でしたが...参加してよかったです。日々の自分の業務をこなすだけ、いえ、こなすきれずにただ走り続けている状態ですが、みなさんからの報告を伺い、感想や意見を自由に述べ合う中から、明日への活力が湧いてきました。自分も研修を企画しなければならない立場なのですが、とてもとても参考になりました。
- ・ 相手の話を真剣に聞いているかいはよく分かる。私のような学生の話に耳を傾けてくださって嬉しかったです。大学院で学んだことを現場で1つずつ地道にコツコツと実践されていて感銘を受けた。教師という職業に携わる方達のラウンドテーブルがあると良いと思いました。
- ・ 福井大学で RT を何回か経験していますが、静岡でのこの RT は運営のしかたや雰囲気少しちがっていてとても勉強になりました。それは特に一番はじめのセンター長さんのご挨拶と次のガイダンスにあったと思います。明確な考え方や進め方の話があり、臨む構えのようなものを参加者が共有できたと思います。お二人の先生のミニ講演の内容が良かったです。学ばせてもらうことができました。テーブルの報告が、内容は全く別ですが参考と勉強になりました。他の先生も含め話し合えたことで「しず（ぞ）ーか」が近くなりました。

以下 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻「教職大学院 Newsletter No.68」より抜粋

#### 福井大学教職大学院准教授 風間寛司

昨年度に続く2度目の取り組みは、11月23日（日）10時から16時まで静岡駅前のホテルアソシア静岡で、静岡大学教育学研究科附属教員養成・研修高度化推進センター、静岡大学教育学部と本学教職大学院との共催によるラウンドテーブル「教師と学校を支える学びあうコミュニティを培う」が開催された。静岡県教育委員会、静岡市教育委員会、浜松市教育委員会からご後援頂き、参加者は定員を大幅に上回る88名（県外参加者20名）で、職種も現場の先生方、教育委員会などの教育行政、研究者等、様々であった。

このラウンドテーブルは、本学教職大学院が予



算獲得した教師教育改革コラボレーションの予算を活用して開催されたものである。本学関係者の参加は8名である。オープニングセッション、ミニ講演①「今求められているおとなの共同の学び—子どもたちの豊かな学びを創り出すために」早稲田大学村田晶子教授、自己紹介、報告Ⅰ（報告40分、意見交換30分）、ミニ講演②「市民参加による学校づくりの意義と可能性」常葉大学仲田康一講師、報告Ⅱ、感想記入、クロージングセッションという構成であった。1日開催の中で、講演、報告のサイクルを午前、午後で2サイクル繰り返すコンパクトで飽きの来ないデザインだった。1グループ6～7名で14グループ構成され、第1回の省察を踏まえて、発表時間を10分長くし、じっくり語り合える時間が保証され、共感的に語り合い、聴き合うことができた。

私の参加したグループ2のメンバーは、福島大学の研究者教員の方（ファシリテーター）、県内の事務主幹の方と静岡大学山崎保寿教授のお二人の報告者、元静岡市教育委員長、静岡県立高校から県外大学院に派遣されている教諭の方であった。

事務主幹の方の報告は、学校経営にスクールマネージャーとしてどう関わるかというものであった。静岡県公立小中学校事務職員委員会が作成した「しずおかコスモスプラン」を紹介していただいた。コスモスプランでは、学校事務職員を「スクールマネージャー」として位置付け、安全・安心な学校づくりのための地域に開かれた学校における事務職員の役割を担う、理想とする事務職員像が示してあった。静岡県における教育の基本目標は『有徳の人』の育成である。ご自身の経歴とそこで取り組まれた数々の挑戦を伺い、とてもパワフルで根本から問い直すような強みをお持ちの方だと感じた。その強みを生かし、職務の自覚と責任、誇りを感じて実践されていることがひしひしと伝わってきた。

学校事務職員は、大規模校でなければ複数配置にはならない。その中で、一人一人の事務職員がスクールマネージャーとして動いていくのは組織の中でのミッションを自覚していくことから始まる。また、事務職員の年齢構成の今後の推移をデータで示しつつ、世代交代が起きることを予見した中で、「中学校区を単位とした学校事務連携処理」の試行がようやく始まり、チームで事務職員を育成していく仕組みの中で、実践している様子が目に見えるようであった。話を伺いながら、私が中学校現場で一緒に勤めた事務職員の方を思い浮かべながら聴いていることに気付いた。生徒や保護者、教職員の困り感に寄り添いながら、職責を全うされようとしている方、特に、学校環境を整えたり、保護者の負担軽減に努めたり、様々に挑戦する姿が思い返された。事務主幹の方が、ラウンドテーブルで報告されていることに感銘を受けた。

静岡大学の山崎保寿教授からは、静岡大学教職大学院と静岡県総合教育センターとの連携を基盤とした「教員養成の高度化を踏まえた教職大学院と教育センターとの連携型モデルの開発」についての昨年度のシンポジウムまでの一連と取り組みの成果検証が報告された。具体的には、教職大学院の授業で開発した研究教材を活用した研修プログラムを提案する【開発型講座】、ミドルリーダー育成プラン及び学校改善支援プランを提案・検討する出張授業を実施する【出張型講座】、教職大学院の授業に外部講師が担当する連続的な枠を設定する【連続型講座】の3つのプロジェクトを実施して、教員養成の高度化をねらうモデルカリキュラムである。センターでは様々な活動を行っているそうである。教育委員会への人材リストの提供、学校教職員へのラウンドテーブルの提供、大学院修了生に対するフォローアップ体制と県外派遣の現職教員のネットワーク構築などの取組である。その中で、他大学との連携の難しさとその克服について語られていた。

休日に志をもってラウンドテーブルに臨んだ皆さまと、とてもよい雰囲気の中で実践について語り合えたことがうれしかった。静岡大学世話人の洪江かさね准教授からは「学校マネジメント力の育成」を特色の一つにしていきたいというお考えを伺った。また、教育学部の4年生が3名参加し、「卒業してもまた参加したい」と、小グループのラウンド形式による省察の実践を聴くことの価値を感じてくれていることがうれしいと感想を伺った。第3回の開催が県内に広く周知され、より大きな輪となり、継続して参加する方が一人でも多くなることを切に願っている。

#### 福井県教育庁嶺南教育事務所 加藤勝代

今の職場に変わってから、県外の研究発表会等にはよく参加するようになりましたが、福井大学以外の教職大学院を知る機会はありませんでした。つまり、教職大学院＝福井大学教職大学院ということでした。そのような私にとって、「実践研究ラウンドテーブル in 静岡 2014」への参加は、参加することで感じた福井大学との違いから、改めて福井大学が大切にしているものを再確認する機会となりました。

それは、「院生自身の問いを待つ」ということです。

静岡大学ラウンドテーブルが始まってまもなく、担当者の方からラウンドテーブルの趣旨や方法について詳しい説明がされました。これは、第2回である今回のラウンドをよりよいものにするために、第1回の反省を踏まえ共通理解の必要性を感じて行われたことと思います。そう予想してもなお、このことは私にとってこの日最大の違和感を感じる場面でした。それは、私が福井大学教職大学院での2年間で、最も苦慮し最も成果を得た自分の思考を辿るということに大きく関係していることだと感じたからです。

教職大学院に入学してから半年あまり、私はカンファレンスの意味、省察の意味が全く理解できず、月に1度集まって互いの実践を語り合い聴き合うことのねらいが分かりませんでした。それは、私自身の勉強不足によるところが大きかったのだと思いますが、スタッフからの詳細な説明はなく、院での学びとは何なのか悶々とした日々を過ごしていました。

このときに、今回のような趣旨説明を受けたなら、そういうことかと一人合点し、早々に研究実践に取り組み始めたかもしれません。そして、それは一見すると順調な歩みにも思えます。

しかし、この2年あまりの「何故?」「どうして?」「何のために?」といった、自分は何を疑問に思っているかもはっきりしないところからの疑問づくりと、その答えを探すための遅々とした自問の日々、遠回りに思える語り合いを通した挙げ句の答えにつながる種探しの日々が、省察の本当の意味を実感的に教えてくれたと今感じています。早く答えにたどり着きたい焦燥感を押さえ、じっくりと思考することの大切さです。

自分の思考と向き合うには、一旦自分の思考を突き放して距離を置かなければなりません。そのために、カンファレンスで実践を交流したり今回のように比較体験したりすることで、違いに気づいたり新たな発見が導かれたりするのだと思います。

早稲田大学の村田晶子教授の講演では、大人が知識基盤社会を生きるうえで求められる力について考えさせられ、教職員研修につながる学びの種がありました。ラウンドテーブルでは、静岡のあらゆる立場の教職員がそれぞれの立場から実践している教員の資質・力量の向上策を聴き、情熱をもらいました。また、自分の実践を基にしたやり取りからは、実践を振り返るときの押さえるべき観点の確認ができました。

他者の声に耳を傾けること、そしてそのことを通して自分の内なる声に耳を傾けること、そしてそれらの声を基に、目的に照らし合わせて柔軟に改善していくこと。これまでの院での学びを通して、今自分が大切にしていることをまたゆっくり考える機会を得ることができました。貴重な機会をいただき、また楽しく学びのある時間を一緒にさせていただいたスタッフの先生方、ありがとうございました。教員養成や大学改革等の様々な教育課題に、学校の教職員はもちろん、福井大学、そして全国にいる関係者が、それぞれの場で力を注いでいることを感じました。全国にいる大勢の関係者の一人として、自分も目の前の仕事に向き合っていこうと思います。

## 4 実践研究東京ラウンドテーブル @ 明治大学

### (1) 概要

平成 26 年度の実践研究東京ラウンドテーブルのテーマ「コミュニティ学習支援コーディネーターの力量形成とその組織」である。会場は明治大学研究棟 2 階第⑨会議室で、12 月 6 日は 14:00-17:00 にパネル・ディスカッションとグループ協議が行われ、12 月 7 日（日）にラウンドテーブルが行われた。

12 月 6 日（土） パネル・ディスカッション

- 1 持続可能な地域づくりを支える公民館職員の研修  
岡山市立中央公民館 重森しおり氏
- 2 社会教育施設職員の学び合い講座  
大阪教育大学 出相 泰裕氏
- 3 教育委員会と大学の協働による公民館職員の長期的な研修の組織  
福井市教育員会事務局生涯学習室 熊野 直彦氏

地域での学び合いを支える実践を展開していくためには、力量形成を持続的に支える組織が必要である。3 名のパネリストにより、地域や職場で取り組んでいる社会教育職員の研修が紹介された。提案された取り組みをもとに、小グループでさらに話し合いを深める。参加者は主に地域行政に関わる人々夜学校関係者。各地域での取り組みを紹介しながら熱心な討議が展開された。

12 月 7 日（日） ラウンドテーブル：実践の長い道行きを語り、展開を支える営みを聴き取る

1 グループ 5, 6 名の 12 グループによるラウンドテーブル。地域や職場で自分たちの実践をじっくりあとづけその省察を踏まえて実践編み直していく。試行錯誤しながら大切に進められてきた取り組みを伝え合い、じっくりと語り合う中で、確かな学びが生まれたひとときであった。

9:20 ~ 9:40	自己紹介
9:40 ~ 10:50	報告 1
11:00 ~ 11:40	ポスターセッション
12:30 ~ 13:30	報告 2
13:40 ~ 14:50	報告 3

(小林真由美)

### (2) 参会者の声

福井大学教職大学院准教授 小林真由美

12月にして突然の大雪に見舞われた福井から逃げるようにして東京に到着。空の青さとハイヒールで颯爽と歩く女性の軽やかさに、だから福井は嫌なんだとぶつぶつ言いつつ、二度目の東京ラウンドテーブルに参加した。昨年度は二日目だけの参加だったので、今回は一日目から、社会教育に携わる方々の提案をいただき、地域コミュニティということについてじっくりと考える機会を得ることができた。

私が3つの提案をお聞きする中で、まず思ったことは、私自身が社会教育に関してこれまで全く無知であり、知ろうとしていなかったということである。ESDや国際理解といった今日的課題に向き合った研修を行う一方で、プロジェクトチームまで結成しながら公民館の充実を図ってきたという岡山市の中央公民館。学び合い講座の開催によって職員の学びの機会を確保するだけでなく、企画者の力量形成や協働を培ってきた大阪教育大学。そして最も身近であるはずの福井大学履修証明プログラム。こんなにも一生懸命に地域での学び合いに寄与する人たちの姿にこれまでなぜ目を向けることがなかったのだろうか。とりわけ、福井大学と連携して研修を積み重ねている福井市の取組は、福井市教委熊野直彦氏の聴き手を魅了するすてきなプレゼン力とも相まって、私に大きな衝撃を与えた。コラボレーションホールのすぐそばに研究室のある私は、時々お集まりになる公民館の皆様の姿を見ながら、「私には関係ないこと」とどこかで思っていたに違いない。そうやって閉ざしてしまうことが地域のコミュニティづくりを阻んでいるのである。熊野氏の話をお聞きするとすぐ、その内容が教職大学院で行われている学びのスタイルと全く同じだということに気づいた。語り合い、振り返り、記録に残す。その探究のスタイルは学校でも地域でも大学でも変わらない。要はその地に学びたいという意欲があるなら、そのコミュニティは機会を設けるだけで自然とできあがる。しかしながら、その「機会を設ける」ということが大切である。公民館の果たす役割が「地域のコーディネーター」である一方、そのコーディネーターの存在が組織化、継続化、活性化の鍵を握る。それが行政であり大学であろう。熊野氏が言われた時間軸としての継続性と、空間軸としての広がりという観点から考えると、この地域コミュニティを学校にもつなげていくことはできないか。一小学校一公民館という恵まれた環境にある福井市では最近では小学校だけでなく、中学生の地域貢献が進められている。地域の役に立って認められるという有用感が、地域を愛する気持ちに繋がり、やがては地域を担う気持ちを喚起する。学校教員である私の立場からこんな話をさせていただき、熱く楽しい時間が過ぎた。

翌日のラウンドテーブルでは、偶然にも神奈川で教員として勤務する昨年度の教職大学院修了生と同じグループとなり、これまた彼の奮闘ぶりを聴くことができた。共に語り合いながら懐かしさを味わい、素敵な時間を過ごすことができた。

明るい日差しのさす東京から、雪で邪魔されキャリアバックを引くことさえできない福井に戻りながら、行きとちょっと変わって「この福井のために、あんなに一生懸命取り組んでいる人がいる」ということに胸打たれていた。私こそ、この地域を愛し貢献するために何を為すべきかもう一度考えねばと奮い立ち、ぜひ一度あの履修プログラムに参加したいなあと考えていた。

#### **福井大学教職大学院准教授 小林和雄**

今回の東京ラウンドテーブルは、学校教育ではなく、公民館や博物館、教育委員会の社会教育主事などの社会教育に関わる方との交流であり、福井大学の学生は参加しないということであった。私も初めての経験で話についていけるかとても不安であった。何かポスター発表をしてほしいと頼まれたが、社会教育を研究している方々に、「社会教育とは何か」すらよく知らない自分にできることを見いだせなかった。

そこで福井大学の教職大学院の学生が3年前から参加している美浜町役場の社会教育企画の一つである美浜はあとふる体験について紹介することにした。参加した学生が撮影した画像や動画、感想などをもとに地域の社会教育との連携によって、学生が体験を通して様々な学びを深めていることを発信しできた。

また、グループでの実践の紹介でも、地域の大人の学びを支える多様な試みを聞くことができ、学校教育、社会教育と分野が違っていても、人を育てる、才能を引き出して、伸ばす自助への援助、学び続けるコミュニティの構築という視座にたてば、大きな違いはなく通底して流れているものがたくさんあった。とても参考になったラウンドテーブルであり、教師としての力量形成には欠かすことができない貴重な場である。まだ、参加したことがない教職大学院のスタッフは、次回必ず参加するようにしたい。

#### **福井大学教職大学院特命助教 半原芳子**

2014年12月6日（土）、7日（日）と明治大学で「実践研究 東京ラウンドテーブル」が開催されました。1日目は「コミュニティ学習支援コーディネーターの力量形成とその組織」というテーマで、3名のパネリストが地域や職場で取り組んでいる社会教育職員の研修を紹介し、その後小グループで話し合い

が行われました。

2日目はポスターセッションとラウンドテーブルがあり、私はポスターセッションで報告を、ラウンドテーブルでファシリテーターを務めました。ポスターセッションには顔なじみの公民館主事さんや初対面の方などたくさんの方が関心を寄せ聴きに来てくださいました。以前から知っている方は私の報告を聴き「そんなことをやっていたのね」と驚いておられ、既知であっても報告を通じた新たな関係性が築けたように思いました。

ラウンドテーブルでは「そうそうカフェ」という葬送の学び合いの場をコーディネートされている大竹さんの実践と、明治大学で子ども達との探求活動「登戸探求プロジェクト」を行っている石原さんの報告を聴く機会に恵まれました。大竹さんとは以前からの知り合いなのですが実践をじっくり聴くのは今回が初めてでした。大竹さんは葬送の世界では大変著名な方で、著書『葬儀の実用事典』をお持ちの方も多と思います。ご実績十分な大竹さんがご自分の専門性を真摯に問い直し、実用書を「葬送マニュアル」から「葬送ナラティブ」へ書き換えることを試みていらっしゃる姿は、今後私が自分の専門性について大きな壁（問い）にぶつかった時必ずや参照することになるだろうと思いました。明治大学の石原さんは「登戸探求プロジェクト」を単位取得が目的ではなく自分がやりたいからやっているのだそうです。社会人になってからも登戸探求プロジェクトを続けたいそうで、「1年やって2年目の目標ができ、2年やってまた3年目の課題ができた。だからきっと将来もやり続けると思うんです」と明るい笑顔でさらりと言っておられました。石原さんの「学び」のフレームの大きさに触れ、自分のフレームの小ささに気づきました。

実践を語ることで得ること・広がること・問い直せること・築けることは、同時に聴くことによっても起こるのだと改めて感じました。語る・聴くことによる学びのダイナミズムを経験し、次のラウンドテーブルがまた待ち遠しくなりました。次はいよいよ春の「実践研究 福井ラウンドテーブル」です。

## 5 大学との連携による学校活性化フォーラム @ 宇都宮大学

### (1) 概要

宇都宮大学教育学部は「大学との連携による学校活性化フォーラム」を継続的に開催してきており、今年度で8回目となる。教師教育改革コラボレーションの予算が付き、福井大学からラウンドテーブルに参加するようになったのは昨年度(2013年度)2月開催のフォーラムからであり、今回で2回目である。宇都宮大学の教職大学院がこの4月から出発する直前のフォーラムに参加できたことは非常にありがたく、お互いの教職大学院の特徴から学び合いながら、今後とも取り組んでいきたいと考えている。

2月14日(土)10時から17時頃まで宇都宮大学教育学部で宇都宮ラウンド(「平成26年度 大学との連携による学校活性化フォーラム～校内研究授業を元気にする～」)が開催された。昨年はちょうど日程が長野県伊那小学校の公開研究集会と重なり、私(森透)は学生を連れて伊那小に参加していたので宇都宮は今回が初めてであった。昨年は大雪でお互いに帰路が大変であったことを懐かしく思い出すが、今回の天候は晴れで昨年のような心配は全くなかった。ラウンドの主催は「宇都宮大学教育学部地域連携専門委員会(スクールサポートセンター)」、共催は「教師教育改革コラボレーション」であり、主催団体については詳しいことは分からないが、今回のラウンドは学部をあげて取り組んでおられるように感じられた。

前日の2月13日(金)は本学教職大学院の拠点校である東京都板橋区立中台中学校の公開研究集会であったので、私と半原先生は中台中に参加し、その足で夜に宇都宮市に新幹線で移動したのである。中台中は校長を初め先生方は一丸となって頑張っておられ内容のある研究集会だったという余韻を残しながらの宇都宮市への移動であった。

2月14日(土)は9時に宇都宮駅に到着した中台中の現職院生である星野先生と、私・半原先生、そして昨夜宇都宮で合流した杉山先生と4名でタクシーに乗って宇都宮大学に向かった。10時から宇都宮大の学生・院生と福井の院生・教員との交流会であった。福井県教育研究所の研究員4名の方々も参加され総勢20名弱の交流会であった。司会は私が個人的に知り合いの宇都宮大学の丸山先生であったので、気軽に和気藹々と交流が進められたように思う。

12時30分からは全体会で藤井佐知子学部長の挨拶のあと、松本敏先生をコーディネーターとするパネル・ディスカッション「宇大の教職大学院が育てたい力」が開催された。100名ほどの参加者があり、パネリストは渡辺浩行先生、原田浩司先生、司城紀代美先生で、それぞれのお立場から教職大学院への熱い思いが語られた。1時間30分という限られた時間であったが、育成する3つの力(学校改革力・授業力・個への対応力)について具体的にお話された。

14時10分から16時30分までの2時間20分が小グループでのラウンドテーブルであった。実践を語り合う小グループのラウンド形式は福井大学が最初に試みてきた歴史があり、現在このようなやり方が宇都宮も含めて、長崎・東京・静岡と全国に広がっている。私のグループは2報告あり、7名参加で若干人数が多いかなという感じであった。細かいことではあるが、机の配置が丸く真ん中の1つの机にグループ番号の表示があったが、この机は不要であり真ん中を空けずに7名の机をお互いにぴったりくっつけた方が至近距離でよかったのではないかと感じた。教室には3グループが同時並行で語り合っている

るので、グループの内部は出来るだけ近いほうが声も聴き取りやすいと感じた。もう1点注文をつけるとすれば、参加者一覧表はいただいたが各グループの参加者一覧表がなかった。各グループの参加者名簿も同時に配布されるとお互いの自己紹介もよりやりやすかったのではないかと思う。さて、2つの報告は①「特別支援教育の現状と課題~本校の実践から~」（栃木県那須塩原市立厚崎中学校・特別支援学級担任・藤田真知子先生&手塚結美先生）、②「『同じ仲間だから』における資料吟味と授業の工夫について」（日光市立今市第三小学校・大森真弓先生）であった。私が司会者を務めたが、報告の先生方は、最初は若干緊張されておられたようであるが、語りだすと熱くなりだし、その実践プロセスでの悩みや感動を紹介され、聴いて欲しい相手を求めていることがよく伝わってきた。報告①は、特別支援学級での取組みであるが、まさしく校長のリーダーシップと深い理解のうえで、新たなチャレンジを行っている実践報告であった。お二人の先生方の真摯で熱い思いがびんびんと伝わってくる報告で、特別支援教育とはいかにあるべきか、保護者との対応、職場での先生方との協働をいかに構築するのか等々、それらをリードするのが校長の役割であることを改めて感じさせてくれた報告であった。報告②は平成26年度後期内地留学生というお立場での道徳の授業実践で、小学校3-5年の道徳資料の内容吟味を通して、道徳授業の在り方を根本から組み変える斬新な取組みの報告であった。道徳教材を「与えられたもの」という受けとめではなく、内容の分析を踏まえた教材の再構成を行うことの重要性が提起された報告であったと思う。福井から栃木に来て、全く異なる土地ではあるが、先生方のテーマと真摯な取組みは、当然ではあるが、全国どこでも共通する思い、共感する内容に満ちていると改めて感じた。司会者としてうまく運営できたかどうか分からないが、私としては初対面の方々と共感を持って熱く語り合うことができたという感動と充実感を味わうことが出来た。グループの先生方に深く感謝したい。

さて、最後の全体会が16時35分からあり、プログラムに「総括 講評 福井大学教職大学院 森透教授」とある。朝、大学に到着したら松本敏先生に「森さん、よろしくね」と頼まれてしまった。松本先生とは長いお付き合いなので断りようもなく、「なんでもしますから」とお返事をした。全体会で私が話したかったことは2つあった。1つ目はこの4月から出発する宇都宮大学教職大学院への激励のメッセージ、2つ目はその内容にかかわる本質的な問題である。前者については、午後のパネル・ディスカッションと小グループでのラウンドテーブルに触れて共感を持って参加できたことをお話させていただいた。後者については非常に難しいテーマで、うまく伝えられたどうかは今でも心配であるが、福井大学教職大学院と宇都宮大学教職大学院のコンセプトの違いである。福井では現職院生は勤務校を離れずに大学院に通い、学校の課題を正面から学校の同僚と共に取り組み、その取組みに大学の私たちも参加させていただくというコンセプトの大学院で、これが「学校拠点方式」といわれる福井のシステムである。宇都宮の場合は2年間勤務校を離れ、チームを組んで、「外から」学校の改革課題を提案するというシステムと理解した。この理解が正しいかどうかは分からないが、なぜこのようなコンセプトにされたのか。パネル・ディスカッションで3つの力を提起されていたが、この3つの力は非常に重要であり、だからこそ、学校に根ざし、勤務校の同僚と共に現職院生は格闘されることこそがよいのではないか、と思うのである。この点については今後、福井と宇都宮は今までどおり長いお付き合いになるので、お互いに学び合いながら、吟味し検証していきたいと考えている。

最後に、今回の宇都宮訪問で福井のメンバーとおいしい餃子とビールで乾杯したことは忘れられない。ボリュームのある、かつ多種多様な餃子を味わうことが出来たことも感謝したい。当日は福井大学教職大学院で最も重要な「長期実践研究報告会」であった。2年生の院生の2年間の集大成である長期実践を語り評価する審査会であった。私たちは、これの参加を免除されて宇都宮に来ることができたのである。宇都宮はそれだけの内容があったと改めて感じている。松本敏先生を初め宇都宮の先生方に感謝するとともに、福井の同僚の先生方にも改めて感謝したい。

(森透)

## (2) 参会者の声

### 福井大学教職大学院特命助教 半原芳子

2月13日(土)に宇都宮大学にて開催された「平成26年度 大学との連携による学校活性化フォーラム」(宇都宮ラウンドテーブル)に参加した。昨年続き2回目の参加となる。午前は「学生・院生交流」、午後は「パネル・ディスカッション」と「教育実践について語り合うラウンドテーブル」という内容だった。宇都宮大学のこのフォーラムには、同大学の関係の先生方、院生を始め、栃木県の多くの市町の教育関係者と現場の先生方が集う。宇都宮大学では来年度から教職大学院がスタートするが、昨年のパネル・ディスカッションでは省察を取り入れた宇都宮大学教職大学院のカリキュラムが議論され、今年は宇都宮大学教職大学院が育てたい力(「学校改革力」「授業力」「個への対応力»)が具体的に紹介・検討された。このように宇都宮大学は教職大学院開設に向け、そのあり方を現場の先生方と広く丁寧に議論を積み重ねてきている。そのため現場の先生方の期待も高く、みんなの教職大学院であるという自負がお会いするみなさんのご発言や気持ちから伝わってきた。宇都宮大学の松本敏先生がパネル・ディスカッションの中で「これからもお互いに議論しぶつかり合いながらいい教職大学院をつかっていきたい」とフロアに呼びかけておられたこと、そしてフロアにいた栃木県の教育関係者および現場の先生方がその呼びかけにしっかり頷いておられたのがとても印象的だった。宇都宮大学教職大学院は現場の先生方と共にある教職大学院としてこの先も歩を進めていくのだろうと確信した。

ラウンドテーブルでは、日光市立栗山小学校にご勤務の芳賀先生の実践を聴いた。もう一人の報告者が欠席だったこともあり、約2時間芳賀先生の実践を聴く機会に恵まれました。芳賀先生は人口減少が進む町で、学校づくりを通じ、地域づくり・町づくりを実践しておられる。私は福井大学の履修証明プログラムで公民館主事さんたちの実践や取り組みをうかがう機会をいただいているのだが、芳賀先生の実践は学校の先生の実践と公民館主事さんの実践をあわせたものであるように思った。芳賀先生の実践を聴きながら先生のこの実践をどのように持続させていけるのかという問いが私の中で生まれた。学校の先生には異動がある。学校教育と社会教育の境目が無い芳賀先生の豊かな実践が、芳賀先生が異動された後も引き継がれ持続・発展していくためにはどうすれば良いのか、そのために聴き手である私は何を考えれば良いのかラウンドテーブル中考えに考えた。実践研究福井ラウンドテーブルの「Zone C コミュニティ」では、コミュニティの発展における持続性が継続的に議論されている。私はこれまでZone Cに参加していながら自分の中でこの問いをよく吟味していなかったことに気づいた。よく吟味していたならば芳賀先生の実践にもっと寄り添えたはずである。そうした後悔と申し訳なさが残るラウンドテーブルだった。

次は、実践研究福井ラウンドテーブルである。誰かの実践を支えられる自分であるために大いに学びたいと思う。宇都宮で出会ったみなさんとの再会も楽しみである。また、宇都宮と福井のみなさんの実践交流がどんなものになるかわくわくする思いである。

(『福井大学教職大学院 Newsletter No.70』, 3頁より抜粋)

### 福井大学教育地域科学部附属中学校教諭／福井大学教職大学院准教授 森田史生

2月14日(土)宇都宮大学ラウンドテーブルに参加した。福井から宇都宮へは、東京に向かい、東京から東北新幹線「やまびこ」に乗って1時間ぐらいで栃木の県庁所在地である宇都宮に到着する。初めて訪れる地にわくわくしながらも、日本の交通網は東京を起点として放射状に広がっていること、東北新幹線は栃木を通して東北に伸びていること。また、東京へは栃木や群馬からも通勤通学していると社会科で教えてい

るが、我が身で体験することで、新幹線で1時間の距離は通勤可能だと社会科学習の実感ができた。

宇都宮駅に降り立つと、「餃子日本一 宇都宮」の文字とほのかに餃子とラー油の匂いが漂ってくる。宇都宮は餃子日本一の消費量を誇っているだけあって、駅前広場に餃子屋がいくつも見える。こんなにたくさんの餃子のお店を一度に見ることは初めてで、「さすが宇都宮」と感動した。

宇都宮大学は駅よりバスで10分ほどのところにあり、福井大学と雰囲気似ていた。午後からのパネル・ディスカッションは、「宇都宮大学教職大学院が育てたい力」をテーマに、4月からスタートする教職大学院で育成する3つの力「学校改革力」「授業力」「個への対応力」にそって、パネラーから話を聞いた。宇都宮大学教職大学院の理念は福井大学と同様で、理論と実践の架橋や往還ができる教員、省察できる教員を育成し、教師教育力を向上することである。この3つの力の中から、どの切り口でアプローチしていくかをそれぞれの方向性からの話であった。

その後、実践を語り合うラウンドテーブルが行われた。約90名が13グループに分かれ、1グループ7名のうち2名が各60分の時間で実践発表し、語り合う。私のグループは、開設する教職大学院に入学する学部生と現役中学教員、教育委員会、小学校教員2名、ファシリテーターの宇大教職大学院の先生の7名でスタート。発表者の2人は、ともに小学校の研究主任で、校内で「学び合い」の授業研究を進めている実践と現在抱えている課題を中心にした発表であった。現在研究主任が抱える悩みが共通していた。研究は進めているが、先生方に授業改革の意識をもってもらい、どのようにその成果を実感してもらえるかを試行錯誤しながら取り組んでいるというものであった。

話し合いの柱は、①研究主題（サブテーマ）に仮説は必要か？②基礎・基本の習得をしっかりとやるのが大切だ、そこを教えていくのが授業だ！についてどのように考えていくかであった。この2点はどの学校でも直面する課題であり、授業改革、学校改革をしていく第1歩であると思う。まさに、宇大教職大学院がめざす「3つの力」を問う内容であった。この2点については、福井大教職大学院での取り組みや福井大附属中の実践なども交えて話をすることができた。協働の学び合いや探究型の授業を展開する上では、「仮説―検証―評価」の教師目線の研究では、分析型になってしまい、到達しているかどうかの評価に目がいきがちになる。福井のように実践を通した子どもたちの変容の姿から新たな学びを構築する省察的実践の必要性。そのために子どもの学びをどのように見取っていくかがやはり重要なポイントであると感じた。授業をどのように見ていくといいのか、授業研の在り方を変えることが授業観の変化に通じていくと改めて考えさせられた。

今年度は県外ラウンドにいくつか参加させていただいた。今まで福井のホームグラウンドだけで発表をしてきたが、県外に出て自実践を語り、聞くことで、自分たちの実践を捉え直し、方向性を確認することができた。今回、貴重な機会をいただいた宇都宮の先生方に感謝申し上げたい。

（『福井大学教職大学院 Newsletter No.70』、4頁より抜粋）

## 6 教育復興シンポジウム福島の教育復興へ向けてⅣ @ 福島大学

### (1) 概要

大震災後の福島県の教育復興について、主催者が行った学校状況調査を踏まえ、今後の展望をより具体的にイメージしていくために、シンポジウムとラウンドテーブルが行われた。なお、会場は福島市保健福祉センター5階大会議室で、主催は「大震災後の福島県の教育復興を進める会」で、当日は10:30-17:00に各報告・議論が行われた。

1000年に1度の大きな災害からの復興は、その未来を支える子どものための教育と、それに関わる人々の学習に負うところが大きい。今このときに教育が変わらなければ、いつ変わるのか！という思いに支えられ、ねがいが共有された活動が数多く展開されている。同時に、活動が形骸化したりねがいが陳腐化してしまい、他者との連携や協働が起きにくくなったり、残したいと思われる活動の持続可能性が低下したりし始めているという実態もある。



こうした課題にどのようにアプローチするのかということについて、以下の内容で検討がなされた。

#### 第1部 地域の未来を拓く創造的教育復興

基調報告 OECD 東北スクールのチャレンジ～アクティブ・ラーニングの展開～

福島大学副学長・OECD 東北スクール統括責任者 三浦浩喜氏

基調報告 学校改革の条件～京都市立堀川高校を事例として～

大谷大学文学部教授・元京都市立堀川高校長 荒瀬克己氏

#### 第2部 "生きる力"と省察的学習コミュニティ ～教育実践福島ラウンドテーブル～

実践報告 実践的指導力を問い直す～教員資質の転換のために～

福島大学人間発達文化学類学校ボランティア支援室 齋藤幸男氏

教育実践ラウンドテーブル

～福島の教育復興と教員資質向上平成26年度学校状況調査を踏まえて～

コーディネーター 福島大学人間発達文化学類教授 松下行則氏

### (2) 参会者の声

#### 福井大学教職大学院コーディネーターリサーチャー 加藤正弘

文科省参事官、福島県教育庁理事の祝辞で始まったプログラムは二部構成となっており、第一部は基調報告2件、①OECD 東北スクールのチャレンジ～アクティブラーニングの展開～、②学校改革の条件～京都市立堀川高校を事例として～。第二部は実践報告とラウンドテーブルという構成。第一部の参加者は70名、第二部のそれは30名であった。①は、福島、宮城、岩手の被災地から中学生・高校生100人を集め、2年半にわたる集中スクールと地域スクールを経て、「2014年8月、パリで東北の魅力を世界にアピールするイベントをつくる」というプロジェクト学習の経過と結果を報告。午後のラウンドテーブルは、コーデ

ィネーターが行った「震災後の学校状況調査」をもとに、福島の教育復校と教員資質向上を語り合い、最後に「かるた」にして表現しようというユニークな取り組み。全体として、復興を視野に入れた教師教育をさぐるイベントとなっていた。



荒瀬克己先生の基調報告



OECD 東北スクールの報告

### 福井大学教職大学院客員教授 西川満

3月7日(土)に福島市で行われた福島ラウンドテーブル「教育復興シンポジウム 福島の教育復興へ向けてIV」に参加した。午前第一部「地域の未来を拓く創造的教育復興」をテーマに基調報告が行われた。

まず、福島大学副学長の三浦浩喜氏から「OECD東北スクールのチャレンジ ～アクティブ・ラーニングの展開～」についての報告があった。歴史は福島に文明の転換点となる教育を求めている、千年に一度の震災で教育が変わらなかったら二度と教育は変わらないであろうと熱く静かに語られた。被災地の1000人の中高生が集まり、イベント「東北復興祭〈環WA〉in PARIS」を開催した。2日間でのべ15万人を集め、震災を乗り越えた東北の若者たちの力を世界にアピールしている映像に大きな感動を覚えた。

次に、この1週間に、福井、福岡、福島と日本で「福」の付く全ての県でのラウンドテーブルに参加したというあの荒瀬克己氏が、「学校改革の条件 ～京都市立堀川高校を事例として～」と題して講演された。学校はしっかりとした学力をつける場所であり、その場限りの「閉じた学び」でなく、基礎基本、活用力、学習意欲の学力の3要素を生涯にわたり学習していく基盤が培われるよう、「新たな学びをデザインできる指導力」について学校や教育委員会は直ぐに議論を深めなければならないとの主張に強い共感を覚えた。

午後は「生きる力」と省察的学習コミュニティ」をテーマに、実践報告と教育実践福島ラウンドテーブルが行われた。まず、福島大学の齋藤幸男氏から、行政・学校・大学三者が一体となって、未来を創造する信頼される教師を養成すべく実施している学生ボランティア活動について報告があった。また、コーディネーターの松下行則氏から震災後の学校状況調査結果について、いまだ3%の学校が避難状況にあること、2年



グループのまとめを報告する

教育ボランティア



話し合いながら模造紙にメモ

あとでカルタを書く

前と比べ避難児童に対して特別な指導をしている学校は7%と半減していること等々の報告があり、その後ワールドカフェを行った。一昨年の福島訪問や、全国校長会等でこれまで何度もお聞きしていたが、起きてしまったことからどう学びどう成長したかということが大切であること、震災をとおして教育の在り方を見直し、新しい開かれた学校でもっと子供に考えさせたいという取り組みなど今回も心をゆすぶられる話ばかりであった。

最後に「教育復興カルタ作り」があり、私は「学び合い 負荷を加えて たのしんどい」と感想を記した。

# 付 録

# おわりに

## 教師教育改革コラボレーションの成果中間報告として

冒頭の「はじめに」で松木健一が述べたように、教師教育改革コラボレーションは平成 25・26・27 年度事業推進費「グローバル社会に必要な教師教育の革新をスピーディに実現する連携事業の推進」を受けて設置された機構である。2014 年度の本機構の構成は以下である。

実施主体：福井大学教職大学院

連携機関：宇都宮大学，神奈川大学，関西学院大学，静岡大学，上越教育大学，長崎大学，  
和歌山大学（以上，協働実践系）の 8 大学  
お茶の水女子大学，東京大学，奈良女子大学，東北大学，北海道大学  
（以上，協働研究系）の 5 大学

教師教育改革コラボレーションは，それぞれの連携機関（大学・大学院）の地域性に根ざした独創的な教員養成・教師教育の共有化をめざしつつ，「ラウンドテーブル」を機軸として「分散型コミュニティ」の構築を進めている。

教師教育改革コラボレーションの成果中間報告である本報告が「実践研究福井ラウンドテーブル」にかかわってくださっている全ての皆様にとって，また，教師教育コラボレーションに属する連携機関（大学・大学院）の同僚の皆様にとって，それぞれの実践と省察を促し得る重要な道標になると幸いである。

なお，本報告内で主に□枠内に示した文書は，福井大学教職大学院 News Letter からラウンドテーブルにかかわる記事を抽出し，その微調整を行ったものである。一方，枠外の文書の多くは文末に示した執筆者の書き下ろし原稿になっている。本報告を編集，執筆するにあたり，福井大学教職大学院及び関係諸機関の皆様から多くのご助力とご支援をいただいたことに心から感謝申し上げたい。また，本報告が多くの人々の手に渡り，本報告で示した「分散型コミュニティ」への挑戦が広く福井県内外の学校や大学・大学院，教育関係諸機関に周知され，新たなコミュニティ間の結びつきが生まれることでグローバル・コミュニティの構築に資することを祈念し，編集を終えたいと思う。

（木村優）

## 執筆者

### はじめに

松木 健一 (福井大学教職大学院教授)

### 第1章

柳澤 昌一 (福井大学教職大学院教授／専攻長)

木村 優 (福井大学教職大学院准教授)

### 第2章

笹原 未来 (福井大学教職大学院講師)

岸野 麻衣 (福井大学教職大学院准教授)

小林 真由美 (福井大学教職大学院准教授)

二宮 秀夫 (福井大学教職大学院教授)

山崎 智子 (福井大学教職大学院講師)

半原 芳子 (福井大学教職大学院特命助教)

杉山 晋平 (福井大学教職大学院特命助教)

小林 和雄 (福井大学教職大学院准教授)

富永 良史 (福井大学教職大学院非常勤講師)

木村 優 (福井大学教職大学院准教授)

森 透 (福井大学教職大学院教授)

### 第3章

藤井 佑介 (長崎大学教育学部准教授)

森 透 (福井大学大学院教育学研究科教授)

梅澤 収 (静岡大学教育学部教授／学部長)

渋谷 かさね (静岡大学教育学部教授)

小林 真由美 (福井大学大学院教育学研究科准教授)

宮下 哲 (福井大学大学院教育学研究科准教授)

### おわりに

木村 優 (福井大学教職大学院准教授)

## 『2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書

### -ラウンドテーブルの広がり と 深化-

編集：福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）「教師教育改革コラボレーション報告書」編集委員会（木村優，藤井佑介）

発行：福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）

発行日：2015年3月31日

連絡先：〒910-8507 福井市文京 3-9-1

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）松木健一

E-mail：matsuki@f-edu.u-fukui.ac.jp